

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
清水久男（大田区立郷土博物館学芸員）	滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	樋口良一（版画堂）
- 8、『版画家名覧』は、版画堂のホームページ <http://www.hanga-do.com/> でもご覧いただけます。

戦前に版画を制作した作家たち (6)

川崎伊三郎 (かわさき・いさぶろう)

洋画家宇治山哲平が出身地の大分県日田町(現在の日田市)で発行した版画誌『朴ノ木』第1号(1933.4)に《壺》、第2号(1933.7)に《飾壺》を発表。武藤完一によると『朴ノ木』は4号まで刊行となっているが、現在確認できているものは1号と2号である。【文献】武藤完一「版画と詩誌『鳩笛』をみる」『大分新聞』(1934.2.2) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

川崎巨泉 (かわさき・きよせん) 1877 ~ 1942

1877(明治10)年6月2日堺市に生まれる。本名末吉。巨泉の他、芳齋、人魚洞等とも号す。兄源太郎は堺で印刷出版業を営み、『住吉・堺名所并二豪商案内記』の著書を持つ。1892年堺市在住の浮世絵師中井芳瀧に入門。摺物画や引札、ポチ袋画、風俗錦絵などを手掛ける。1896年頃、画の勉強のために上京。一時期、日本画家奥村土牛宅に下宿する。1897年帰阪し、当時大阪市に住んでいた師芳瀧方に寄寓。翌1898年芳瀧の長女ハマ子と結婚。芳瀧の後を引き継ぎ『大阪名所』(長野劍助発行 1900)、『大阪名所』(中井徳太郎発行 1903)などに石版画の下絵を描く。『此花』第二枝(宮武外骨発行 1910.2)には武内桂舟、尾形月耕らと並んで「現今浮世絵師」として紹介されている。その後、化粧品・売薬・アサヒビールの宣伝広告など商業広告や新聞広告に下絵を描いて図案家として活躍。この頃の弟子に後に挿絵画家と知られる小田富弥がいる。一方で明治後期頃から郷土玩具に魅せられ、在阪の郷土玩具趣味家と親交、趣味会に参加。おもちゃ絵の展覧会の開催や数千枚にのぼる肉筆、木版によるおもちゃ絵集を制作頒布して生計の費とした。師芳瀧の死後、自家版『芳瀧画集』(大阪刻文社 1931)を刊行。郷土玩具研究の個人誌『人魚』7冊の発行(1921.2 ~ 1928.8)や『郷土趣味』『旅と伝説』『鯛車』などの雑誌や大阪の郷土研究誌『上方』などに多くの論考を発表した。1942(昭和17)年9月15日逝去。

主な木版おもちゃ絵集には、『巨泉おもちゃ絵集』全20集(おもちゃ絵版画会 1918.1 ~ 1919.8 100枚)、『おもちゃ十二支』(だるまや書店 1918 全12枚)、『起上小法師画集』全12集(木戸忠太郎蔵版 1924.6 ~ 1925.5 木版36図)、『おもちゃ箱』(1925 全100枚)、『おもちゃ十二月』(だるまや書店 1926)、『郷土の光』全20輯(1926.9 ~ 1928.5 200図)、『おもちゃ画譜』全10輯(1932.9 ~ 1935.10 木版口絵各5枚)、『おもちゃ博覧会』全4編(だるまや書店 1936 木版各5枚袋入)等。その他に版画雑誌『HANGA』第4輯(1924.12)に《肥後の木葉猿》、第10輯(1926.7)に《ぼたん》の木版画の掲載などがある。【文献】森田俊雄『おもちゃ絵画家・人魚洞主人川崎巨泉のおもちゃ絵展とその画業の周辺一附・川崎巨泉年譜(稿)・「これがおもちゃ絵だ!」関連講演会レジュメ』(2006) / 森田俊雄『和のおもちゃ絵 川崎巨泉』(社会評論社 2010) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

川崎順三 (かわさき・じゅんぞう)

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第24号(1941.12)の会員名簿に名前があるものの、版画作品は確認されていない。当時広島県佐伯郡中村小学校に所属。【文献】『九州版画』24(1941.12)(加治)

川崎小虎 (かわさき・しょうこ) 1886 ~ 1977

1886(明治19)年5月8日岐阜市御園町(現美園町)に生まれる。本名中野隆一。9歳で上京し、東京美術学校嘱託として絵画指導(後に同校図案科教授となる)にあっていた祖父川崎千虎に大和絵を学び、千虎没後は小堀鞆音に師事。1905年県立岐阜中学校卒業。同年東京美術学校日本画科に入学。日本画を下村観山と小堀鞆音、洋画を藤島武二と和田英作、南画を高森碎蔵に学ぶ。1906年川崎家を継ぎ、川崎姓となる。1910年東京美術学校日本画科卒業後は、一時期小・中学校の図画教師となる。1916年第10回文展で日本画《花合せ》が特選。帝展、日展の審査員を務め、1929年帝国美術学校教授に就任。その後、東京美術学校講師を経て、1943年東京美術学校教授となるが、翌1944年の学校改革で同校教授を辞任。戦後は日展、日本画院を中心に作品を発表した。1961年日本芸術院恩賜賞受賞。1977(昭和52)年1月29日逝去。日本画家の川崎鈴彦は長男、鈴木春彦は次男、東山魁夷は長女すみ子の婿にあたる。版画は関東大震災による各地の惨状を記録した『大正震災木版画集』(画報社 1924 全36図)に《宮城前天幕村》《神明明神焼跡》《震彩後の芝浦》《大震災後之被服廠跡と安田邸》《待乳山》《大震災後之和田倉門》の木版6図を制作。その他『日蓮聖人御伝木版画 宗祖六百五拾遠忌御報恩記念』(日蓮聖人御伝版画刊行会 [1928.12 33図])に結城素明、野田九甫、小堀鞆音らと合作で木版画数葉の制作がある。【文献】『大正震災木版画集』(画報社 1924) / 『川崎小虎画集』(京都書院 1987) / 『版画にみる東京の風景』図録(大田区立郷土博物館 2002) / 『山田書店新収目録』40(2000.12)(樋口)

川崎大治 (かわさき・だいじ) 1902 ~ 1980

1902(明治35)年3月29日北海道札幌市に生まれる。本名池田政一。早稲田第二高等学校を経て、1926年早稲田大学英文科卒。在学中より児童文化の研究、童話の創作に従事し、18歳で尊敬する巖谷小波の門をたたき、童話作家を志す。昭和初年の社会主義運動の影響を受けて新興童話作家連盟に、1930年には日本プロレタリア作家同盟に加入する。1931年代表作となる『小さい同志』を槇本楠郎などと共著で出版。1935年童話作家協会に入会。戦時中は教育紙芝居の制作と実演に取り組む。戦後は日本児童文学者協会の設立に関わり、民主主義児童文学運動、芸術紙芝居に情熱を傾ける。1967年日本児童文学者協会会長。童話集など児童関係の著作多数あり。1980(昭和55)年8月8日逝去。版画は東京吉祥寺の朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《武蔵野第三》を発表。同誌には文学や芸術の関係者が多く参加している。【文献】川崎大治『のぼらとうさぎ』(西荻書店 1951) / 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 第1巻』(講談社 1977)(加治)

川崎正人 (かわさき・まさと) 1903 ~ 1960

1903(明治36)年3月30日青森県西津軽郡木造に生まれる。青森県師範学校を卒業し、木造の小学校に勤務。

のちに西洋画の教員検定試験（1927年頃の文検か）に合格し、青森県立木造中学の図画教諭となる。1930年西郡図画教育研究会の発起人となり、創立に尽力（1927年頃か）。1932年11月に今純三を講師に招いた「版画講習会」（主催：西郡図画教育研究会）でエッチングを知り、今の世話でエッチングプレス機を入手。翌年の『エッチング』第3号（1933.1）にエッチング研究所製のエッチングプレス機所有者として紹介され、第7号（1933.5）に作品図版とともに「描き始め」を発表。1935年に今純三が西田武雄を迎えて主催した「エッチング及び洋画座談会」にも出席し、『エッチング』第35号（1935.9）に座談会の報告「西田先生を迎えて エッチング二年半」を寄稿。以後も同誌の常連としてしばしば作品図版や寄稿文が掲載されている。また同年、佐藤米次郎らの版画誌『陸奥駒』第20号（1935.12）にエッチング《新竹の城門》を発表した。1936年第5回日本版画協会展に銅版画《漁村》が入選。また、今純三・関野準一郎と「青森エッチング協会」を設立。『エッチング』第51号（1937.1）に「青森エッチング研究会 年頭研究会」「自己を語る」を寄稿し、エッチング図版《今純三先生》が掲載された。翌1937年の第9回第一美術協会展にエッチング2点（1点はカラーエッチング）が入選し、『エッチング』第56号（1937.6）には「カラーエッチングを試みて」を寄稿。また、同年の青森の東奥美術展覧会の審査員を今純三と務めている。1938年に勤務校である木造中学で「エッチングと木版画講習会」（講師：西田武雄・武藤完一・小野忠重・林紀一郎）を開催。翌年の版画誌『青森版画』創刊号（1939.2）に《雪景》、第2号（1935.5）に《花》を発表。1940年の日本エッチング作家協会の結成に際しては、準会員となり、同年の第1回日本エッチング展に《風景》を出品。なお、協会の会員名簿には「錦州師道学校」とあり、この頃は満州に移住していたらしい。1941年の第2回展に《林〔檜〕園》、1942年の第3回展にも《林檎園》を出品した。戦後は郷里に引き上げ、小中学校の校長などを歴任。1960（昭和35）年6月7日青森県で逝去。青森県師範学校の後輩で青森の教育版画の普及に大きな足跡を残した江渡益太郎は、「戦後の青森県の版画教育は今純三や川崎正人らの耕しの上に成り立っているといっても過言ではない」（『青森県版画教育覚え書』と評している。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』（津軽書房 1979）／『今純三・和次郎とエッチング作家協会』展図録（渋谷区立松濤美術館 2001）／『エッチング』3・7・35・38・47・51・56・96・101・114 など／『創作版画誌の系譜』（三木）

川路柳虹（かわじ・りゅうこう） 1888～1959

1888（明治21）年7月9日東京府芝区三田台町に生まれる。本名誠。父太郎は幕末から明治初期の官吏、教育者。母花子は工部美術学校でフォントネージに学んだ女性。父方の曾祖父は、日露和親条約に調印した幕末幕吏の俊英・聖謨。母方の祖父は能吏、書画鑑定家、蔵書家の浅野長祚。1908年京都市立美術工芸学校修了。在学中に「塵溜」を含む「新詩四章」を詩誌『詩人』に発表、口語体自由詩の嚆矢として注目された。その後、東京美術学校に入学し1913年卒業。在学中から卒業間もない時期に、美校生を中心とした「アブサント会」、雑誌『モザイク』、「行樹社」「黒耀社」などの小グループをたて続けにつくり、既成の美術概念を問う前衛的美術運動を展開した。このうちアブサント会では、回覧雑誌制

作において、自画・自刻・自摺による版画号の制作を計画している。また雑誌『モザイク』に創作版画を意識した挿絵を掲載。1913年長谷川潔や永瀬義郎ら版画家とともに仮面主催洋画展覧会を開催し、油彩画を出品。1914年田中喜作主宰の美術店田中屋が創刊した版画入りの雑誌『卓上』の発行に協力した。こうした美術運動の一方で、美校在学中の1910年、処女詩集『路傍の花』を上梓。1916年には曙光詩社をおこして詩誌『伴奏』を創刊、本格的に新詩運動を開始した。1918年に『現代詩歌』、1921年に『炬火』を創刊、その間の1917年には詩人の大同団結を呼びかけて詩話会を結成、その後も詩人たちのアンソロジーとなる『日本詩集』の発行を主導、詩人と現代詩の普及に尽力した。1927年に渡仏、1928年帰国。1933年には、母校である東京美術学校の校歌と学生歌を作詩した。こうした詩人としての活動と併行して、1919年頃から美術批評を積極的に執筆し、20年代以降は西洋と東洋の美術、日本画・油彩画・彫刻・前衛・版画などの分野を横断する批評を精力的に書きつづけ、美術批評家としても活躍した。日中戦争勃発の1937年から太平洋戦争期にかけて「国民芸術研究所」を設立、雑誌『藝苑』発行や展覧会主催などを通じて独自に文化活動を推進した。1942年結成の日本文学報国会の会員としても活動。戦後はほとんど美術批評を執筆せず、もっぱら詩人として活動、1957年には生前最後の詩集出版となった『波』で芸術院賞を受賞した。版画の制作はごく少数で、1924年発行の『詩と版画』第4輯収録のリトグラフ《試作》が確認できる程度である。1959（昭和34）年4月17日死去。【文献】滝沢恭司編『美術批評家著作選集 第6巻 川路柳虹』（ゆまに書房 2011）（滝沢）

川島理一郎（かわしま・りいちろう） 1886～1971

1886（明治19）年3月9日栃木県足利郡足利町に生まれる。1899年東京の小学校を卒業し、三井呉服店に奉公する。1905年渡米。ニューヨークで雑貨商を営む父を手伝う。1910年ワシントンのコーコラン美術学校を卒業。翌1911年にはニューヨークのナショナル・アカデミー・オブ・デザインも卒業し、渡仏。アカデミー・ジュリアンに入り、翌年アカデミー・コラロッシに転じる。1913年渡仏してきた藤田嗣治を知り、交友。また、同年のサロン・ドートンヌに入選。1915年アメリカに引き上げ、1919年帰国。1920年再渡仏。1922年サロン・ドートンヌ会員に推挙され、翌年帰国。以後も、たびたび渡欧した。1925年国画創作協会に新たに第二部（西洋画）が設けられ同人に迎えられたが、1928年国画創作協会の解散により、第二部同人の梅原龍三郎らと国画会を組織。同会の創立会員として活躍するも、1935年退会。1937年からは新文展の審査員などを務め、戦後も日展を中心に活躍。1948年日本芸術院会員、1949年日展運営会理事、1958年日展理事、1969年日展顧問などを歴任した。版画に関しては、1928年5月の『アトリエ』第5巻第5号にモノタイプ《水浴》《ヴェニス》《伊太利風景》の図版とともに「モノタイプのやり方」を発表。1930年の第5回国画会展にモノタイプ《ベニス風景》《夏》を出品している。1971（昭和46）年10月6日東京で逝去。【文献】『川島理一郎画集』（日動画廊 1973）／『アトリエ』5-5（1928.5）（三木）

川瀬巴水（かわせ・はすい） 1883～1957

1883（明治16）年5月18日東京市芝区露月町（港区

新橋五丁目)で糸組物職人の父庄兵衛、母かんの間に生まれる。本名文治郎。1910年鏑木清方に正式入門、後「巴水」号をもらう。1917年吉川ムメ(1898年8月生、後年「梅代」に改名)と結婚。1918年「郷土会第四回展」で伊東深水作の渡邊版木版画『近江八景』に感激。版元渡邊庄三郎の下《塩原おかね路》《塩原畑下里》《塩原志ほがま》3図を試作、好評で庄三郎は巴水に新版画の風景画を託す。1920年『旅みやげ』第一集完成、版画家の地位を決定付けた。木版画集『三菱深川別邸の図』制作、三菱本社が国内外の関係者へ贈呈し版画家巴水が世界的に知られる。1921年『東京十二題』完成、巴水版画成立。1922～26年『日本風景選集』予約出版。1923年関東大震災で写生帖や画業の成果を消失。10月22日～翌年2月2日生涯最長の旅行をする。1924～29年『旅みやげ』第三集出版、巴水様式確立。版元伊せ辰「双作版画会」(深水美人画と巴水風景画を一組にして刊行)で1925年2月～27年9月まで5回出版。1927～28年版元美術社『新日本八景』制作。1929～30年酒井川口合版制作。1930～31年版元東京尚美堂で制作。1930年3月アメリカのトレド美術館主催「現代日本版画展」に92図出品。渡邊版『東京二十景』完成。1931～32年版元芳壽堂、版元土井貞一で制作。1932年鉄道省国際観光局日本観光宣伝ポスターを庄三郎の下、深水と巴水(“The Miyajima Shrine in Snow”)で各1万枚製作。1934年頃、榛原で団扇用『巴水団扇絵十二景』制作。1935年版元加藤潤二『巴水人形畫集』出版。巴水自ら《両班》《華盛頓記念塔(ポトマック河畔)》制作、サンフランシスコの塩田竹蔵に贈呈。1937年銅版画《妙見の楠(香川県豊浜)》制作は巴水のスランプ対策とされる。1939年6月1日～7月4日朝鮮旅行、関西美術社版『朝鮮八景』制作、震災後作品の詳細な描写表現に加え、震災前の大胆で広大な構図の魅力が再現され、戦後作品へ続く新境地を開く。1940年版元多田鉄之助、制作加藤潤二で『昭和東都 著名料亭百景』制作。1952年文部省文化財保護委員会無形文化課で木版画技術記録作成、永久保存決定。翌年、無形文化財技術保存記録木版画《増上寺之雪》完成。1953～55年酒井川口合版を中嶋尚美社が再版。1957(昭和32)年11月27日東京都大田区で逝去。墓所は万福寺(東京都田代谷北烏山五丁目13番所在)。絶筆《平泉金色堂》が法要に際し配付される。【文献】渡辺規編『川瀬巴水木版画集』(毎日新聞社 1979) / 「特集 川瀬巴水」『浮世絵芸術』153(国際浮世絵学会 2007)(清水)

川面義雄(かわづら・よしお) 1880～1963

版画家、複製木版の爲の肉筆画模写版下描き及び彫摺技術指導者。1880(明治13)年4月17日大分県宇佐郡院内村字小坂に生まれる。父庸三・母もと。叔父に神道家(古神道「稜威会」)川面凡児がいる。1905年7月に東京美術学校日本画科卒業。画家としての雅号は「萊山」、「黙」。1908年審美書院に入社。大正期に木版画工房・金泉社を根津に起こして複製や自画版画などを制作。複製の大きな仕事として、徳川黎明会蔵本3巻・五島美術館蔵1巻の「源氏物語絵巻」全4巻の着彩木版複製の制作を総合プロデュース(模写版下描き・担当者選別・彫摺指導・紙選択等)を担当。1943年2月から着手し、1949年に徳川黎明会蔵本のうち一巻分完成。1953年文化財保護委員会技術保持者となる。1955年から東京芸術大学の資金で「源氏物語絵巻」複製事業を継続再開し1959年に残る2巻分を完成。1961年秋には五島美術館

蔵の蜂須賀本一巻(絵4図、詞書15枚)の木版複製に着手し1963年7月に完成した。携わった彫師(佐藤壽祿吉・大倉半兵衛・前田謙太郎・長嶋道男・岩下佐武郎)、摺師(荒井鶴吉・村田勝磨・藤井周之助・今井男子・木下初太郎・横山文次郎・藤原弘)及び安達豊久の支援をうけた。1963(昭和38)年8月10日死去、享年83。なお大判多色摺版画には、1922年の《半蔵門脇の秋色》、《浅草玉姫神社》、《浅草寺の降雪》、《天王寺冬の月》、《御茶ノ水の晴夜》、《明治神宮南門》。1923年の《春雨の紀ノ国坂》、《帝国劇場雪の朝》、《品川夜の海》、《芝罘山の夕立》、《丸の内早春》、《不忍池弁天堂の朝》、《濱町河岸の夕陽》、《根津権現雪の夕》、《上野東照宮前の桜花》等の豎判風景版画が知られる。【文献】船橋満著『木版画王 川面義雄』(1978.3 非売品)(岩切)

川邊正巳(かわなべ・まさみ) 1906～1997

1906(明治39)年鹿児島市に生まれる。九州帝国大学卒。在学中に郷土玩具に興味を持ち蒐集をはじめ。大学を卒業後、鹿児島で銀行員として働き、終戦まで日本各地や中国大陸、朝鮮半島などの郷土玩具を蒐集したものが、現在は「川邊コレクション(玩具、版画、文献等8743点)」として鹿児島県歴史資料センター黎明館の所蔵となり、鹿児島県指定有形文化財の指定を受けている。当時、川邊は各地の玩具蒐集家と交流しており、1939年には、朝鮮・釜山の清永完治を訪問し、交友を深めている。版画はその清永に勧められ、清永の主宰する郷土玩具同好会誌『土偶志(デコシ)』第4期2号(1938)に《大阪四天王寺の張子馬》《高松の土馬 兵隊乗》《ハルビンの泥馬》の3点を発表。第4期3号(1938)掲載の紀行文「鮮満北支行 其の一」には清永へ版画を手渡しした事情が記されている。また、清永主宰の版画誌『朱美之集』第1冊(1940.5)に《椿》、第2冊(1940.8)に《近江達磨》、第3冊(1940.12)に《開聞嶽遠望》、第4冊(1941.9)に《百合》を発表。当時、鹿児島市下荒田町107に在住(『朱美通信』2)。1997(平成9)年に逝去。【文献】『創作版画誌の系譜』鈴木文子「玩具と帝国趣味集団の通信ネットワークと植民地」(『仏教大学』文学部論集)93号(2009.3) / 岩切信一郎「鹿児島備忘録 川辺正巳、谷口午二さんのこと」『一寸』44号(学藝書院 2010.11) / 吉井秀一郎「川邊コレクション 調査報告書1・2」(『黎明館調査研究報告』25・26号 2013・2014)(加治)

河西 榮(かわにし・さかえ) 生年不詳～1936

1928(昭和3)年1月の日本創作版画協会第8回展に木版画《郊外風景》《湖沼風景》が初入選。翌年の第9回展にも《玉川村風景》《川べり(一)》《川べり(二)》が入選した。画歴としては、1915(大正4)年11月に名古屋で開かれた第2回アマチュア洋画展覧会(名古屋・栄ホール 主催:雑草社)に出品。その後、1926年の第7回中央美術展、同年の春陽会第4回展から1929年の第7回展、1932・1933年の第10回・11回展に入選しているが、展評などから判断して版画ではなかったようである。1936(昭和11)年8月9日逝去。【文献】『みづゑ』119・380(1915.1・1936.10) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

川西 英 (かわにし・ひで) 1894～1965

1894(明治27)年7月9日神戸市に生まれる。戦前・戦後の神戸を代表する版画家で、サーカスや神戸風景などに取材した連作で知られる。幼名は英雄。1925年に7代目善右衛門を襲名。雅名を「英」と改める。1915年描きためた油絵などを雅らべて「川西英雄洋画個人展」を開催。評判になり、卒業を機に絵画制作を止めるつもりが、制作を続ける後押しになったという。同年兵庫県立神戸商業学校を卒業。家業の穀物問屋を営む傍ら、山本鼎の版画と出会い、独学で木版画を始める。1922年関西学院の美術部「弦月会」が主催する創作版画展に木版画《銭湯図》など7点を出品。当時関西学院に学んでいた北村今三・田邊唯雄(のちの春村ただを)を知る。また、同年兵庫県東出郵便局の局長に任命される。1923年第5回日本創作版画協会展に《椿》《街》《女》が初入選。翌1924年山口久吉の主宰する『HANGA』の第1輯(1924.2)に《軽業》を発表。以後、第5・8・11・16輯(1925.2～1930.4)に作品を発表した。1928年第8回日本創作版画協会展の大阪展に《曲馬》4点と《カルメン》を出品し、会友に推挙される。また、同年の第7回国画創作協会展に《曲馬》など3点が初入選した。翌1929年も第9回日本創作版画協会展と第4回国画会展に出品。国画奨励賞を受賞し、以後、国画会展に出品する。また同年(1929)、北村今三・春村ただを・福井一郎・菅藤霞仙と神戸で版画グループ「三紅会」を結成。第1回展に《曲馬》《曲馬ロンド》《カルメン》など17点を出品したのをはじめ、1936年の第6回展まで開催し、計68点の作品を発表した。また、1930年の兵庫県美術家聯盟、1942年の兵庫県新美術家聯盟の結成に参加している。1931年に設立された日本版画協会展には、会友として参加。第1回展に《単衣婦人》《玉ころがし》を出品し、翌1932年に会員に推挙された。以後、同年の第2回展から1965年の第33回展まで出品。また、国画会も1932年に会友、1935年に会員に推挙され、1965年の第39回展まで出品。両展を代表する作家のひとりとして活躍した。1936年には、神戸の街並みと人々の風俗を新しい視点で捉えた川西の代表的連作「神戸百景」(1933～1936)が完成。神戸大丸で開いた個展で披露した。1938年からは国の主催する展覧会にも出品するようになり、第2回新文展に《軍艦進水》を無鑑査出品。以後、第3回展(1939)、紀元二千六百年奉祝美術展(1941)、第5回展(1942)、第6回展(1943)、文部省戦時特別展(1944)に出品した。一方で、各地の版画誌にも積極的に関わり、東京の『風』再刊第2号(1929.5)、『きつつき』創刊号(1930.7)、『版芸術』3・4・9・13・21・23～25(1932.6～1934.4)に作品を発表。第25号は「川西英版画集」であった。また、京都の『大衆版画』第1号(1931.8)と第2号(1931.11)、静岡の『飛白』第1巻第2号(1934.9)と第1巻第3号(1935.1)、『ゆうかり』第22号(1934.10)などにも作品を発表している。また、版画絵本『サーカス』・『曲馬写生帖』・『カルメン』(各1934 版画荘)、『京都情景』(アオイ書房1941)など版画を原版に使った優れた刊行本も制作した。戦後も、1946年から日本版画協会展・国画会展を中心に出品した他、同年の第1回日展、翌1947年の第2回日展、1951年の第1回サンパウロ国際美術展、1956年のルガノ国際版画ビエンナーレ、1957年の第1回東京版画ビエンナーレ、1960年の第2回東京国際版画ビエンナーレなどの国際版画展にも出品し、旺盛な制作活動を展開。生涯に1,200点以上の木版画を残した。1949年兵庫県

文化賞受賞。1965(昭和40)年2月20日神戸市で逝去。【文献】『川西英と神戸の版画—三紅会に集まった人々—』図録(神戸市立小磯記念美術館 1999)／『生誕120年川西英回顧展』(神戸市立小磯記念美術館 2014)／『エッチング』106／『創作版画誌の系譜』(三木)

川西祐三郎 (かわにし・ゆうざぶろう) 1923～

1923(大正12)年12月22日版画家・川西英の三男として、神戸市に生まれる。1931年父を師として木版画の制作を始める。1942年関西学院専門部英文科に入学。弦月会(美術部)に入り、活動を始める。同年の第11回日本版画協会展に《風景》、第5回新文展に《朝鮮筆筒のある静物》が初入選。翌1943年の第18回国画会展に《積雪》が初入選。また、第12回日本版画協会展に《挿花》《椿》《あやめ》を出品し、会員に推挙された。1944年関西学院専門部英文科を卒業し、関西学院大学商学部に入學。1945年応召。日南海岸で敗戦を迎える。1946年から再び日本版画協会展・国画会展に出品。1947年関西学院大学商学部を卒業し、阪神電気鉄道株式会社に入社(1957年からは阪神百貨店に勤務、1980年退職)。サラリーマンと版画活動を両立させながら、1949年の第23回国画会展で新会友、1971年の第45回国画会展で会員に推挙され、1972年から2000年にかけては毎年個展も開催した。明快なフォルムによる風景版画を得意とし、1995年兵庫県文化賞受賞。2002年日本版画協会名誉会員推挙。2010年には神戸市立博物館で大規模な回顧展が開催された。現在、神戸市に在住。【文献】『川西祐三郎～版の軌跡～』展図録(神戸市立博物館2010)(三木)

川野 恵 (かわの・とく)

大分県師範学校の大分県美育研究会が発行した『郷土図画』第1巻5号(1931.10)に《秋草》を発表。この号は版画特集号として武藤完一が編集を担当した。その翌月、武藤が発行した版画誌『彫りと摺り』第2号(1931.11)に《燈下》を発表し、「電気スタンドの下に於ける夜の感じをだして見たいと思ひましたが、腕及ばずです。バックは大きな失敗でした」と作者言を寄せている。当時、川野は武藤と同じ大分県師範学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

河野 薫 (かわの・かおる) 1916～1965

1916(大正5)年8月12日北海道小樽市に生まれる。油彩画・版画はほとんど独習。1932年の第8回北海道展(道展)に木版画《花》を出品。初期道展の版画を支えた天馬正五郎は「本展出品の加藤哲之助、河野薫二氏の出品画は、いづれもよく版の効果が考えられた作品である。ことに河野氏の「花」は、バックの摺りになかなかよい効果が表現されていて好きな作品である」(『北海道タイムス』1932.9.23、今井敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあげ』所収)と評している。その後の活動は不明であるが、1943年の第12回日本版画協会展に木版画《日食》《黒い太陽》《人形》の3点が初入選。その後中断があり、戦後は1950年の第18回日本版画協会展に孔版画《人形》2点が再入選。1952年会友、1954年日本版画協会会員に推挙された。また、1952年の第26回国画会展にも初入選。1955年の第29回展に出品の木版画《郷愁》《海の幻想》で国画奨学賞受賞。1958年会友、1961年会員に推挙されている。他に1954年第1回札幌版画協会展に賛助出品。また、数多くの海外展にも出品した。

1965（昭和40）年12月7日東京で逝去。【文献】『第十二回版画展目録』／『第〔18回〕日本版画協会展目録』／『日本美術年鑑』昭和40年版（東京国立文化財研究所1967）／今井敬一編『北海道美術史 地域文化の積みあがり』（北海道美術館 1970）（三木）

川端玉章（かわばた・ぎよくしゅう） 1842～1913

1842（天保13）年3月8日京都に生まれる。本名滝之助。玉章の他、敬亭、璋翁とも号す。蒔絵師の父に蒔絵を学び、中島来章に師事。1866（慶応2）年江戸に出て高橋由一に洋画を学ぶ。第1回内国勸業博覧会（1877）より第4回内国勸業博覧会（1895）まで続けて出品し、褒状を受け、また受賞するなど活躍。1888年開校の東京美術学校に招かれ、1890年東京美術学校教授となる。1896年帝室技芸員。1907年第1回文展から審査員を務め、第5回（1911）まで出品。1909年東京小石川に日本画家の養成画塾として川端画学校を開設して木村武山、平福百穂や洋画に転向した藤島武ら多くの後進を育てた。1912年東京美術学校を退職。1913（大正2）年2月14日逝去。1903年頃から始まった木田寛栗の通信教育教材『絵画講習録』（大日本絵画講習会）に木版による絵手本を描くほか、木版彩色摺『習画百題』全5冊（芸艸堂 1898）、小学校図画科児童教科書『小学画本 乙種巻五』（集英社堂 1901）などに木版画を遺す。洋画家・川端実は孫にあたる。【文献】『京都古書籍・古書画資料目録』6（2005.6）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（樋口）

川端 進（かわばた・すすむ）

飛騨高山の守洞春が中心となって発行した版画誌『版糸』第1号〔1938〕に《山》を発表。「二月のくっきりした山のひだと春の訪れをほのかに思はせる空のよさをねらつて見たのでしたが…」と作者の気持ちを記している。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

川端正明（かわばた・まさあき）

版木会発行の創作版画集『版』第10輯～第12輯（1937.10～1938.1）に木版画各1点を発表。版木会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認である。なお、目次等に作品名は記されていない。【文献】『版』10・11・12（加治）

川端彌之助（かわばた・やのすけ） 1893～1981

1893（明治26）年12月5日京都市に生まれる。京都府立第一中学校を経て、1918年慶應義塾大学法律科を卒業。同年関西美術院に入り、澤部清五郎に洋画を学ぶ。1920年第7回二科展に油彩画《桃》が初入選し、第9回展まで出品。1922年渡仏。アカデミー・コラロッシュに学び、シャルル・ゲランに師事。1924年サロン・ドートンヌに入選。1925年帰国し、第3回春陽会展に初入選。以後、同展に出品し、1932年春陽会賞を受賞。1933年会友、1939年会員に推挙されている。版画は1922年から1924年までの滞仏中に始めたようであるが、1929年の日本創作版画協会第9回展に木版画《マルセイユ旧港》《街燈の下》《鏡とパイプ》が入選。1930年には『HANGA』（神戸・版画の家）第16輯（1930.4）に木版画《フランス風景》を発表している。戦後は、京都市立美術学校

（1949）・京都市立美術学校（1950～1963）・嵯峨美術短期大学（1971～1979）に勤め、後進の指導にもあたった。1972年第1回京都府美術工芸功労賞、1973年京都市文化功労賞をそれぞれ受賞。1981（昭和56）年12月9日京都市で逝去。【文献】『日本創作版画協会第九回展目録』（1929）／『京都の近代版画―円山応挙から現代まで―』図録（京都市美術館 1986）／『日本美術年鑑』昭和57年版（東京国立文化財研究所 1984）／『春陽会七十年史』（1994）／『浅井忠と関西美術院』図録（府中市美術館・京都市美術館 2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

川端龍子（かわばた・りゅうし） 1885～1966

1885（明治18）年6月6日和歌山市に生まれる。本名、昇太郎。10歳のときに家族で東京に移り住む。白馬会洋画研究所と太平洋画会研究所で洋画を学び、その後『ハガキ文学』や『東京パック』、『東京ハービー』、『少年パック』などの表紙や挿絵を制作して早くから知られるようになった。その一方で、1907年の東京勸業博覧会や第1回文展に油彩画を送り入選。油彩画家としても活動した。しかし1913年渡米して半年間滞在した際にボストン美術館等で日本美術に感銘、帰国後に日本画制作へと移行した。この時期を跨ぐ1910年代、実業の日本社発行の雑誌『日本少年』や『少女の友』の附録に木版画による双六原画を多数制作した。また、1915（大正4）年頃、鶴田吾郎とともに小学3、4年生から中学1、2年生くらいまでを対象とした美術の通信教育会社「スケッチ倶楽部」を興し、教本として『スケッチ速習録』を6冊発行、さらに『スケッチ倶楽部画集』として「大和めぐり」（1915）、「木曾路」（1916）、「華巖」（1917）の全三集を発行して版画を掲載した。1915年には《奈良にて》《温泉》《月夜のヨット》《木曾の秋》など一枚摺の木版画制作に臨んだ。同じ時期の1914年、大正博覧会に初の日本画が入選、以後「龍子」と号した。1915年平福百穂、小川芋銭らと珊瑚会を結成、この年院展に初入選した。1917年に同人に推挙され、やがて大画面の作品を出品するようになったが次第に院展の異端的存在となり、1928年に脱退した。翌1929年青龍社を創立し主宰。「健剛なる芸術の樹立」を提唱し、1931年「会場芸術」への指向を明確に示した。1934年時局の問題をテーマとした連作「太平洋」の取材のため「南洋群島」に渡る。帰国後に制作した作品を個展や青龍社展で発表した。1935年帝国美術院会員となったが、翌年辞退。1937年には帝国芸術院会員となったが今度は数日後に辞退、在野精神を貫いた。またその年陸軍の囑託画家となって「満洲」を取材旅行、1938年には大日本陸軍従軍画家協会の結成に参加した。以後、中国や南方方面をたびたび取材した。この頃、木版画《雲崗石仏寺》（1940）などの版画を制作した。戦後も青龍社を中心に活動し、1959年に文化勲章を受章した。1963年自邸内に龍子記念館を開館し自作を常設展示する。1966（昭和41）年4月10日東京の自邸で逝去。【文献】川端龍子『画人生涯筆一管：川端龍子自叙伝』（東出版 1972）／『生誕120年 川端龍子展』図録（毎日新聞社 2005）／『太田区立龍子記念館所蔵作品図録』（1991・2013）／『日本の版画Ⅱ 1911～1920』展図録（千葉市美術館 1999）（滝沢）

河辺 篤（かわべ・あつし） 1898～1975

1898（明治31）年滋賀県に生まれる。同志社大学経

済学部卒。東京の金融機関に二十数年勤務。退職後は染色を稲垣稔次郎に師事し、その後富本憲吉から工芸一般の指導を受ける。1951年には新匠展に初出品（染色作品）し、新匠賞を受け、1952年新匠工芸会友に推挙、1953年に会員となる。戦前のサラリーマン時代から、染色（型染め）に力を注ぎ、その余技として版画の制作も行っている。当時、東京の料治熊太が発行していた版画誌『白と黒』第36号（1933.6）に《苺》、第37号（1933.7）に《箱根芦の湖》、第39号（1933.9）に《採種》、第42号（1933.12）に《鶏頭》、第43号（1934.1）に《朝顔》、第45号（1934.3）に《なんばんきび》を、第2次『白と黒 再刊』第1号（1935.6）には《蜘蛛》を、また料治による『版藝術』第[21]号（1933.12）に《年賀状》、第24号（1934.3）に《鉄の処女（ドイツ）》を発表。1934（昭和9）年に武井武雄が全国の芸術家に呼びかけて始めた年賀状交換会「版交の会」（第3回からは「榛の会」と名称変更）に、河辺は料治の紹介で第3回の1937年から参加する。「榛の会」では「素人締め出し論」が強く、会社勤めであった河辺は途中の第14回と17回を辞退。それでも武井が勧誘状を送ったため、第22回（1956）まで参加する。第14回の後、福岡に、第17回後は京都へ転居。戦争中の1944年12月には滋賀県安土村に疎開するが、年賀状の住所は東京大森となっている。1975（昭和50）年11月に逝去。1977年に『型染 河辺篤作品集』（八宝堂）が刊行されている。【文献】河辺 篤「型染の話 ほんものの桜餅の葉」（『染織現代』21 1975.10）／『型染 河辺篤作品集』（八宝堂1977）／市道和豊『[奇跡の成立] 榛の会昭和21年』（室町書房2008）／『創作版画誌の系譜』（加治）

川辺外治（かわべ・そとじ） 1901～1983

1901（明治34）年2月4日富山県砺波に生まれる。1920年富山師範学校を卒業し、小学校に勤務。1927年東京府専科図画教員試験、1930年文部省検定試験（文検）西洋画用器画科に合格。1932年から富山県立砺波高等女学校に勤務。教職のかたわら絵画研究にも励み、全国の初中等学校の図画教育関係者が出品した1937年の第2回大潮会展に油彩画《草刈り子供》が入選し、特選を受賞。1940年の第5回展でも特選を受賞した。翌1941年の第1回創元展に油彩画《哺食の子供》が入選。また、同年の第4回新文展に油彩画《忙中の食事》が入選し、三井コレクション買上げとなった。版画は1936年7月に東京の日本美術学校で開かれた夏期版画講習会（講師：平塚運一・西田武雄ら）に参加して習得したようで、その帰途にエッチング用具を購入し、教師仲間や勤務先の砺波高等女学校でも教えたという。また、『エッチング』第46号（1936.8）にこの講習会で制作したエッチング《裸婦》の図版が、翌年の第53号（1937.3）には「画業一元」が掲載された。1938年8月に富山中学校で開かれた版画講習会（講師：西田武雄・小野忠重・林紀一郎）にも参加。1939年の『エッチング』第76号（1939.2）に「所感」を寄稿。また、同年の造型版画協会第3回展に《自画像》が入選している。戦後は、富山県洋画連盟の結成に尽力する一方、1948年からは自宅のアトリエを開放し、「砺波デッサン会」を始め、清原啓一ら後進を育てた。また、1953年から再び創元会展、日展（第9～13回展まで）に出品し、同年創元会準会員、翌1954年会員（1973年退会）に推挙されている。さらに1958年には、ジャンルを超えた県内作家の制作グループ「彩彫会」を組織

（1989年解散）し、県下最大のグループに育てた。1983（昭和58）年4月29日逝去。【文献】末永宏宏「砺波地方に疎開した作家と戦後地元作家の動き」『富山県博物館協会デジタル展覧会・電子紀要』（2001）／吉田積「砺波の洋画について 一川辺外治を中心に一」『とやまの洋画史入門編』（富山県立近代美術館 2005）／『創元会60年史』『創元展目録 第1回～第60回（1941～2001）』（創元会 2001）／『エッチング』46・53・71・76（三木）

川辺御楯（かわべ・みたて） 1838～1905

1838（天保9）年10月筑紫国柳川（現在の福岡県柳川市）に生れる。御楯と号す。父は狩野派の画家川辺正胤。久留米藩御用絵師三谷三雄に師事し、狩野派を学ぶ。後に土佐派に転じる。同藩の学者に有職故実や国学を学び、幕末の頃には国事に奔走するが断念。維新後に上京、太政官に出仕。その後神祇少祿官となり京都に移り、土佐光文に師事して大和絵を学ぶ。免職後は京都で友禅の下絵や正倉院御物の模写などを手掛け、1882年第2回内国勸業博覧会、1884年第4回同会で受賞。大和絵歴史画家として名をあげる。皇室への献画も多数。門人に邨田丹陵、中村岳陵など。1905（明治38）年7月24日逝去。古画の複製画と思われるが、木版画《岩佐又兵衛風 遊女案内図》（1880～1890頃）1図が知られる。【文献】『アメリカのジャポニズム展』図録（世田谷美術館 1990）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）（樋口）

川又 昂（かわまた・こう）

長野県下の教師の集まりであった下水内郡手工研究会は版画誌『葵』全5号（1934～1938）を発行したが、その表紙のための題字を版画で作成。他の作品は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

川村浅一（かわむら・せんいち）

版本会発行の創作版画集『版』第6輯（1937.6）、第7輯（1937.7）、第10輯（1937.10）、第11輯（1937.12）に各1～3点の木版画を発表。版本会は同誌に掲載されている校章や題材から愛知県知多郡師崎町（現・南知多町）の学校（当時・師崎町立師崎中学校）の版画同好会と考えられる。また『版』は第12輯までの発行を確認しているが、第1・3・4・8・9輯は未確認である。なお、目次等に作品名は記されていない。【文献】『版』6・7・10・11（加治）

河村目呂二（かわむら・めろじ） 1886～1959

1886（明治19）年岐阜県揖斐郡宮地村（現・池田町）に生まれる。本名弘。号は目呂二。目露二・龍興とも号す。1908年大垣中学卒業後、大阪医学専門学校予科に入学するが、美術への憧れを捨て切れず、1909年中退し東京美術学校彫塑部に入学。1914年同校卒業。同年東京大正博覧会に「河村目露二」名で素焼きの泥人形に着彩した《朝》を出品して話題となる。この年より音楽のメロディと憧れの夢二の語呂を合わせた「目呂二」の号を用いる。1915年レート化粧本舗図案部に入社しデザイン、広告宣伝を手がける。また「あいそめ屋」を立ち上げ、大正風俗を表現した土人形「目呂二人形」を制作し販売する。1920年猫好きな小田切はま子「雪乃」、結婚後は「すの子」と号す）と結婚。大の猫マニアとして、また猫を題材にした猫作品の作家として知られ、三田平凡寺（本名林蔵）の趣味蒐集の会「我楽他宗」に参加。1928年峰岸義一、

齋藤佳三らと主情派美術協会を結成。在野の彫刻家集団「構造社」（1926年設立）には1929年第3回展より参加し、解散する1943年第16回展まで毎回出品を続ける。1944年軽井沢に疎開し、「木通庵（あけびあん）」を建てて定住。戦後は中央画壇から離れ、「龍興（りゅうこう）」と称し、農耕の傍ら、俳句に親しみ、自然を描く生活を送る。1959（昭和34）年9月26日逝去。版画は、中山晋平の木版楽譜『新作小唄』シリーズ《別れの唄》《海の鳥》《椰子の葉陰》（山野楽器店刊 1919～24？）などの木版表紙画を制作。また、齋藤昌三らが設立した日本における最初の本格的な蔵書票の会「日本蔵票会」（1922～1928）に発表した自刻の木版蔵書票などがある。なお、柳屋画廊目録『柳屋』（1929.5 三好米吉発行）には主情派美術協会刊行『主情派現代風俗版画集』第2回頒布作として木版画《妾つれづれの図》の広告記事が掲載されているが、作品は未見。【文献】『柳屋』（柳屋画廊 1929.5）／『山田書店新収目録』40（2000.4）／『構造社—昭和初期彫刻の鬼才たち展』図録（宇都宮美術館 2005）／『河村目呂二の紹介』（岐阜県池田町教育委員会ホームページ 2010.1.22 更新）（樋口）

川森正夫（かわもり・まさお）

静岡の版画仲間が意気投合し立ち上げた童土社が発行した版画同人誌『ゆうかり』の第18号（1934.2）に《舞踏「山に登る」》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

河原華月（かわはら・かげつ）

扇面の木版画集『とうか会』（芸艸堂 1907 全7図）に浅井忠、神坂雪佳らとともに木版1図制作。「とうか会」とは、浅井忠が主宰した図案研究会と云われているが、詳細は不明。【文献】『山田書店目録』35（1998.12）／『近代図案コレクション モダン模様—大正のデザイナー—』（芸艸堂 2008）（樋口）

雁九（がんきゅう）

1940（昭和15）年6月の造型版画協会第4回展に《首》4点が入選し、新版画家賞を受賞。北川桃雄の展評には、「△雁九とは変な名だね。支那人かしら。／二科某氏の匿名ださうだ。本名で差支へがあるにしても△思はせぶり匿名は一寸悪趣味だね。／入賞してゐるが、ルオーの作を思はせる、味だね。ミスチクな深さとまではゆかないけど。／△特色はあるネ。石版かしら。／木版みたいな所もあるし、布目の出てゐる所もある。テクニクの上でも相当苦心してゐる」（『浮世繪界』5-7）とある。【文献】『造型版画協会第四回展目録』／北川桃雄「現代の版画—造型版画展評」『浮世繪界』5-7（1940.7）（三木）

神田進太郎（かんだ・しんたろう）

新潟で創刊された文芸・版画などの芸術を扱った同人誌『土塊』の第1号（1927.12）に《自画像》、第2号（1928.1）に《隣のさきちゃん》《賀状》を発表。【文献】『佐藤哲三の時代』図録（新潟県立万代島美術館 2008）／『創作版画誌の系譜』（加治）

神田武男（かんだ・たけお）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に在学中、生徒が発行した版画誌『刀』第11輯（1931）に《アヤメ》、第12輯（1931）に《無花果といんこ》、第13輯（1932）に《夜明けの歩哨》を

発表。同校を1933年に卒業。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

神田白冢（かんだ・はくし）

新潟で創刊された文芸・版画などの芸術を扱った同人誌『土塊』の第3号（1928.3）に《図案（いちご）》と短歌、第4号（1928.5）に《小品》と短歌、第5号（1928.9）では短歌のみ、第6号（1928.11）には《小品》と短歌、第7号（1929.1）に《年賀状》を発表。【文献】『佐藤哲三の時代』図録（新潟県立万代島美術館 2008）／『創作版画誌の系譜』（加治）

神田秀雄（かんだ・ひでお）

大分の武藤完一が版画講習会を契機に発行した版画誌『彫りと摺り』の第4号（1932.6）に《崖のある坂》を発表。「午後1時間のあきをとらへてとりかかり画く、刻る、刷る、超特急でやりました」と先輩に催促され、短時間で制作したことを「作者言」に記している。当時、大分県大野郡菅尾校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

神原 浩（かんばん・ひろし） 1892～1970

1892（明治25）年11月13日神戸市奥平野に生まれる。1912年関西学院普通部を卒業。上京し、本郷研究所で洋画を学ぶ。翌1913年関西学院高等学部へ2回生として入学するも、中退し、再び本郷研究所で学ぶ。1914年メキシコへ渡航。1916年からキューバのハバナ市アカデミア・ナショナル・デ・ベジャス・アルテスに学ぶも1920年に退学し、渡仏。パリではアカデミー・コロロッシ、グラン・ショミエールに学び、サロン・ドートンヌに2回入選。銅版画の技術も学んだという。1923年帰国。1924年神戸女学院高等女学部の嘱託教員となり、絵を教える。また、1927年には関西学院中学部の嘱託教員となり、図画教師として1940年まで勤めた。1929年第6回槐樹社展に出品。同年の第9回帝展にも油彩画《梅林》が入選している。翌1930年兵庫県美術家聯盟の結成に参加。1931年の第1回展に油彩画《篠原風景》《荒磯》を出品。第3回展（1932）・第5回展（1933）にも出品した。1932年から1933年にかけて神戸女学院が神戸から西宮へ移るのを機に、山本通学舎との別れを惜しみ24点の銅版画《神戸女学院風景》を制作。1933年には現在確認できる銅版画の初個展、「港のエッチング」展（11.6～9 神戸画廊）を開催し、《海港偉観》《滞船》《荷役》《埠頭風景》《釣る人》《帆船鳥瞰》《京橋》などを出品した。1935年に川西英らの版画グループ「三紅会」に参加。第5回展に《六甲山風景A》など7点、翌年の第6回展（最終展）に《神戸住友倉庫》など7点を出品した。また、同年（1935）の第4回日本版画協会展にエッチング《早春の中島公園》など4点が初入選。翌1936年の第5回展に《海港偉観》など5点、1937年の第6回展に《兵庫運河》など4点を出品。また同年（1937）の第1回新文展にエッチング《銀汀（波切海岸）》が入選した。1938年には日本版画協会の新会員に推挙されたが、会員としての出品はなかった。なお、『日本版画協会々報』第30号（1939.2）の「新会員紹介」には「エッチングは田邊〔至〕、竹腰〔健造〕両氏つき修業」との記事があり、帰国後に二人から改めて銅版技法を学んだということか。

1940年日本エッチング作家協会の会員となり、1941年の第2回展に《裏町》《田園詩趣》、1942年の第3回展に《田園詩趣》を出品。1941年には海軍省囑託として海南島に派遣され、海南島風景の連作を制作。「神原浩南島風景展」(大阪・大丸)を開催した。1943年日本版画報公会会員。1945年6月の神戸大空襲で、家、アトリエ、作品を焼失。戦後は大林組大阪設計顧問として勤める一方、神戸のアメリカンスクール、神戸女子短期大学、芦屋女子短期大学、芦屋大学で教鞭をとった。また、神戸大丸でしばしば個展を開催。1955年には「川西英 神原浩」展(市立神戸美術館)が開催され、エッチング33点が展示されている。1970(昭和45)年9月7日神戸市で逝去。関西学院中等部時代の教え子である詩人足立巻一は『木』第8号(梅田画廊 1970.12)に「海の画家」と題する追悼文を寄せている。【文献】『川西英と神戸の版画—三虹会に集まった人々—』図録(神戸市立小磯記念美術館 1999)／『関西学院の美術家 ～知られざる神戸モダニズム～』図録(神戸市立小磯記念美術館 2013)／『日本版画協会々報』30／『創作版画誌の系譜』(三木)

神戸 修 (かんべ・おさむ)

1938(昭和13)年5月開催の第3回京都市展に版画《琉球人形静物》(木版か)を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

観明 (かんめい)

1902(明治35)年頃、小栗風葉『文金島田・上下』(駸々堂)、『白無垢鉄火』(駸々堂)や菊池幽芳『白百合・後』(駸々堂)、前田曙山『辻占売』(春陽堂)、村上波六『時雨笠』(駸々堂)などの小説口絵を手がける。また、「観明」の名前で《マッカサー元帥の肖像》(渡辺版画店 1947)の木版画があるが、同一人かは未確認。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2005.12)／『山田書店目録』72(2006年夏)(樋口)

【き】

菊川多賀 (きくかわ・たか) 1910～1991

1910(明治43)年11月16日札幌市に生まれる。本名孝子。「多賀子」後に「多賀」と号す。1923年豊水小学校を卒業後、北海女学校に入学するが、1924年家族とともに上京、麴町女学校に転入する。その後眼病により失明状態となり学業を断念。1929年父の友人だった清原齊(ひとし)に入門、日本画を学び始める。1937年頃から再び病状が悪化、以後10年間療養生活をしいられた。戦後、1947年清原の紹介で堅山南風に師事し、1948年第33回院展に《閑日》で初入選、以降毎回入選を重ね、第46・47・48回院展(1961～63)に3年連続で日本美術院賞(大観賞)を受賞。1964年同人となる。1982年第67回院展に《文楽人形》で内閣総理大臣賞。裸婦群像、その後は文楽や歌舞伎に画題を求めた作品を多く描いた。1991(平成3)年1月15日埼玉県新座市で逝去。版画制作については、1929年頃に清原齊から手ほどきを受けたといわれるが、戦前作品については未見。戦後は加藤版画研究所から童画13枚(《童画1「羽根つき」》《童画2「たき火」》など)の木版画の制作が知られる。【文献】『近代日本版画大系』第三巻(毎日新聞社 1976)／『原色浮世絵大百科事典』第10巻(大修館書店 1981)／『日本美術年鑑』平成4年版(東京国立文化財研究所

1993)／『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』パンフレット(樋口)

菊地キミ (きくち・きみ)

東京の文化学院専修科に在学中、1934年9月17日より一週間にわたり教室で行なわれたエッチング実習(『エッチング』24 1934.10)に参加。西田武雄が主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第26号(1934.12)に作品が掲載された。【文献】『エッチング』24・26(加治)

菊池契月 (きくち・けいげつ) 1879～1955

1879(明治12)年11月14日長野県下高井郡中野町(現・中野市)に生まれる。本名細野莞爾。幼少より絵を好み、小学校高等科の頃、隣町に住む南画家・児玉果亭に学び、「契月」の号を受ける。高等科卒業後、呉服屋の丁稚や工場、役場などに働くが、画家への思いは捨てがたく、友人の町田曲江(日本画家 1879～1967)とともに京都へ出奔。南画家内海吉堂の紹介で菊池芳文に入門。芳文の元で研鑽を積む。京都新古美術展で受賞を重ね、1903年第5回内国勧業博覧会と全国絵画共進会で受賞するなど将来を囑望されて、1906年芳文の長女アキと結婚、養嗣子となって菊池姓となる。1918年芳文死去後はその跡を継いで京都絵画専門学校教授となる。1907年第1回文展に入選、第2回から第9回まで(第5回を除く)連続受賞で永久無鑑査に選ばれる。1909年より27年間、京都市立美術工芸学校と京都市立絵画専門学校で指導にあたる傍ら、菊池塾を開いて宇田荻邨、梶原緋佐子ら多くの作家を育てた。1955(昭和30)年9月9日京都市で逝去。彫刻家菊池一雄は長男、日本画家菊池隆志は次男。版画の制作は、『義士大観』(義士会出版部 1921)に木版画《母の小袖》、『大近松全集』付録木版シリーズ(木谷蓬吟刊 1923)に木版画《「心中天の網島」の小春》を担当。そのほか芸艸堂版《手毬》《平安朝美人》《つつみ》《少女》(いずれも仮題 制作年不詳)などの木版画が知られる。【文献】『山田書店版画部目録』7(1983.9)／『版画堂目録』2(1989.6)／『山田書店新収美術目録』81(2008春)／『近代美人版画全集』(阿部出版 2000)／『菊池契月展』図録(京都国立近代美術館 1982)(樋口)

菊地宵吉 (きくち・しょうきち)

日本創作版画協会の版画家たちが作品を寄せた版画誌『詩と版画』第13輯(1925.8)に詩「旗」を発表。その年に札幌で創刊された版画・芸術研究の同人誌『さとぼろ』の第2巻3号(1926.3)にアヴァンギャルド風の木版画《版画の生命》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

菊地善二郎 (きくち・ぜんじろう) 1911～没年不明

1911(明治44)年滋賀県水口町(現在は甲賀市水口町)に生まれる。1932年に柴秀夫、小野忠重、武藤六郎らが版画の大衆化を掲げ創設した新版画集団の第1回展(1932年10月15～20日 銀座・川島商店楼上)に《夜店》を出品。1933年からは集団員として参加し、第2回展(1933年3月1～6日 神田・三省堂2階)に《家族》《道化師》《労働者の顔》をはじめ9点の作品を、その後第3、4、6回展(1933～1936)に《瓦焼の家族》《紙芝居》などを出品する。また、並行して刊行された同集団の機関誌『新版画』(1932～1935)にも第6号(1932.11)から参加。第7号(1933.1)以降、第13、14号を除き第16号(1935.4)

まで発表を続け、16号には小文「木版の機械印刷」も寄稿している。京都に学ぶ従兄弟からプロレタリア美術運動のことを知り、版画の制作を始めて集団に参加したと小野忠重に話しており、題材には農夫、瓦焼き、道化師、旅回りの見世物など農村や都会で働く貧しい労働者やその家族・子供などを多く取上げている。これらの展覧会や機関誌などへの発表名は「菊地善二郎」のほか「菊池善二郎」「菊地善次郎」など表記が異なっており、姓名の漢字表記ははっきりしない。ここでは小野の著作『近代日本の版画』の表記に倣った。【文献】『原色浮世絵大百科事典』第10巻（大修館書店 1981）／小野忠重『近代日本の版画』（三彩社 1971）／『創作版画誌の系譜』（加治）

菊地武嗣（きくち・たけつぐ）1880～1945

1880（明治13）年東京、京橋竹川町に生れる。1896年より合田清が開設した生巧館で木口木版の修行に努め、木口彫り5年の年期奉公を終えた後も勤めながら、2階にあった白馬会研究所の夜間部で絵画を学ぶ。そこで知り合った白馬会系の岡本帰一、清宮憲靖らと菊地ら生巧館の仲間たちで版画同人誌『白刀』を創刊する。準備号と見られる2冊と第1号（1910.11）が確認されている。木口木版の名手であった菊地は、彫師としての仕事のほか、編集の一員として中心的な役割を担い、自画自刻自摺の版画家としての制作も行った。その〔準備号1〕（刊行年不明）に《待合室》、オフセット《同人》、〔準備号2〕（1910.2）に木口木版《風呂》（板目木版併用）を発表。第1号（1910.11）にはカット《狗》、《釜無川》〔版種不明〕を発表し、中澤弘光の付録版画《温泉スケッチ》の彫りも担当。また富山房発行『アラビアンナイト』（1915）の岡本帰一による口絵（版画）などの彫師も務めた。生巧館が解散したのは1931年頃であり、その後は家でも彫師の仕事をしたようであるが、和田三造の経営する標準色研究所に勤めている。耳を患っていたためか、その帰途に不慮の自動車事故に遭い、1945（昭和20）年3月6日に逝去。【文献】馬淵録太郎著『木口木版伝来と余談』私家版（ギャラリー吾八売 1985）／『日本の木口木版画』図録（板橋区立美術館 1993）／『創作版画の誕生』図録（渋谷区立松涛美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

菊池 光（きくち・ひかる）1909～1997

1909（明治42）年宇都宮市埴田町に生まれる。1923年宇都宮尋常小学校東校を卒業し、川上澄生が英語の教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に入学。1927年卒業後、栃木県師範学校第二部に入り、翌年卒業して教職に就く。1929年には休職するが、その後栃木県師範学校専攻科に入学し、1933年には築瀬尋常小学校の教師となる。同校の同僚に池田信吾がおり、川上澄生を中心とした版画誌『村の版画』を知る。その第19号（1934.2）に《花》を発表するが、『村の版画』はこの号が最終号となってしまい、その後は版画制作をほとんど行なわなかった。1968年定年退職。1997（平成9）年逝去。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

菊池芳文（きくち・ほうぶん）1862～1918

文久2（1862）年9月17日大坂で表具師を営む市谷家の次男に生まれる。本名常次郎。ほどなく親戚の菊池

家の養子となる。大阪で滋野芳園に学んだ後、1881年頃京都に出て幸野椋嶺に師事。1882年第1回内国絵画共進会に日本画《修学院夏雨》を出品して銅賞を受賞。その後は第3・4回内国勲業博覧会や日本青年絵画共進会、全国絵画共進会などでも受賞を重ね、竹内栖鳳、都路華香、谷口香喬とともに「椋嶺門下の四天王」と言われた。1894年京都市美術学校教諭となる。1907年の第1回から1915年の第9回まで文展審査員を務め、《春の夕・霧の朝》（第5回内国勲業博覧会 1903）、《小雨ふる吉野》（第8回文展 1914）などの傑作を描いて、「花鳥画の芳文」「桜の芳文」と呼ばれる。1909年京都市立絵画専門学校創立に尽力して教授に就任する。1917年帝室技芸員。1918（大正7）年1月18日京都で逝去。日本画家の菊池契月は養嗣子。孫に彫刻家の菊池一雄と日本画家の菊池隆志。『芳文画譜』（田中治兵衛版 1890 1冊全26図）、竹内栖鳳・谷口香喬・山元春挙と京都の四季を描いた『雍府画帖』（芸艸堂 1897 全3冊）、『絵画講習録』（大日本絵画講習会 1907頃）、森川曾文・幸野椋嶺らと合作『祝賀画譜』（芸艸堂 1913）などに木版画を残す。【文献】『山田書店新収目録』38（1999.9）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）／及川益夫『大正のカルチャービジネス』（皓星社 2008）（樋口）

奇山（きざん）

「奇山」名の戦前作と思われる風景木版画の制作が知られる。（樋口）

岸田武次（きしだ・たけじ）

長野県師範学校一部5年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号（皇紀2598年版）（1938）に《善光寺風景》を発表。1939年同校を卒業。【文献】『卒業生名簿昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

岸田美三止（きしだ・みさし）

長野県須坂の信濃創作版画研究会が発行した『樸』第6輯（1935.4）に《賀状》を発表。【文献】『須坂版画美術館収蔵品目録2 版画同人誌『樸』『臥竜山風景版画集』』（須坂版画美術館 1999）／『創作版画誌の系譜』（加治）

岸田劉生（きしだ・りゅうせい）1891～1929

1891（明治24）6月23日に岸田吟香の4男として、東京市京橋区（現・中央区）銀座に生まれる。1908年白馬会洋画研究所（赤坂葵橋）に通い、黒田清輝に師事。1911年、この頃『白樺』を愛読し始め、同誌が紹介するセザンヌら後期印象派の画家達の存在を知り影響を受ける。同年白樺主催の洋画展覧会でバーナード・リーチを知り、さらに柳宗悦、武者小路実篤、長与善郎ら白樺の同人らと交流し、深く影響を受ける。1912年4月「琅玕洞」で最初の個展を開く。同年10月にはヒュウザン会第1回展を高村光太郎、斎藤与里らと開催する。同時に雑誌『ヒュウザン』を創刊。この年には、木版画《築地風景》などがある。1913年フュウザン会を解散する。高村光太郎、木村莊八、岡本帰一らと「生活社」を結成。1914年三笠で個展（2度目）を開き、油絵、ペン画の他、エッチング4点を出品。同年のエッチングとして《天地創造》3点がある。なお、エッチングの技術については、バーナード・リーチに指導を受ける。同年9月二科会創設に関わる。1915年草土社を創立し、多くの若手作家に影響を与える。この年、木版画《The Earth（大地）》がある。ま

た本作品には墨摺と多色摺の2種の作品がある。1917年油彩画《初夏の小道》が二科賞を受賞する。1918年『白樺』百号記念の7月号より、1923年5月号まで表紙絵を担当する。1919年白樺十周年記念主催岸田劉生作品個人展覧会が開催される。1920年『白樺』10月号で「劉生特集号」が編まれる。1921年『劉生凶案聚英閣版画集』（聚英社刊）が編まれ、木版画36点が納められる。彫師には伊上凡骨があたる。1922年小杉放庵、梅原龍三郎らが春陽会を創設し、客員として迎えらる。同年9月日本画のみの個展を開催する。1926年『初期肉筆浮世絵』（岩波書店）を刊行する。さらには1929年、浮世絵の研究者であり、浮世絵版画復刻などを試みた高見沢遠治の『高見沢遠治遺板 浮世絵版画名作集』が刊行するにあたって、その解説を担当する。同年9月、南満州鉄道株式会社の招待で満州に渡る。滞在中には、風景画を描くなどの創作活動の他、個展や講演会なども行っていた。11月29日に帰国し、同（1929）年12月20日滞在地であった山口県徳山町（現・山口県周南市）にて逝去。劉生の版画活動においては、一枚もの他、木版画による装幀や口絵、個展のポスターを多く手掛けている。【文献】『白樺派の愛した美術』図録（京都文化博物館他 2009）／『岸田吟香・劉生・麗子』図録（世田谷美術館他 2014）（河野）

岸本 擴（きしもと・ひろし）

1931（昭和6）年11月の第3回三紅会版画展（神戸）に《港A》《港B》、翌1932年6月の第2回日本版画協会展に《午後》《港A》《港B》、1933年4月の第8回国画会展に《小駅》、9月の第3回日本版画協会展に《おもちゃ》、1935年4月の第10回国画会展に《静物》を出品。平塚運一は《小駅》について、「岸本擴氏の『小駅』は少し平つたくて冷い感じがあるが、この着実な態度は嬉しい。これを土台として、次第に強く行き度いものである」（『みづゑ』340）と評している。また、1934年には静岡の版画誌『ゆうかり』の同人となり、第21号（1934.9）に《午睡》を発表した。なお、住所は、1933年の国画会展出品時は「兵庫県川辺郡小田村」、1934年の『ゆうかり』は「神戸市湊区氷室町2丁目」、1935年の国画会展出品時は「1丁目」となっている。【文献】平塚運一「国展と春陽会展の版画」『みづゑ』340（1933.6）／『川西英と神戸の版画—三虹会に集まった人々—』図録（神戸市立小磯記念美術館 1999）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／『創作版画誌の系譜』（三木）

喜多武四郎（きた・たけしろう） 1897～1970

1897（明治30）年12月12日東京市本所区太平町2丁目91番地に生まれる。院展の彫刻家として知られ、号は寒泉・茸々子（じょうじょうし）。1915年東京府立第三中学を中退。1917年戸張孤雁を知り師事。また、孤雁の勧めで川端画学校に学ぶ。版画は、孤雁の影響で始めたものと思われるが、1919年の日本創作版画協会第1回展に木版画《ダリヤ》が入選。また、1923年3月の『詩と版画』第2輯に木版画《竜舌蘭》を発表している。1919年から孤雁のアトリエに通い、本格的に塑造の指導を受ける。1920年の第7回再興日本美術院展に彫刻《K女》が初入選。同年孤雁の推薦で日本美術院研究会員となり、研究所で石井鶴三から多くを学び、木村五郎を知る。1924年に院友、1927年に同人となり、1961年の日本

美術院彫塑部解散まで、同展を中心に作品を発表した。1962年紫綬褒章を受章。1968年からは日本画院彫塑部会員に迎えられ、同展に作品を発表したが、1970（昭和45）年11月28日東京で逝去。【文献】『喜多武四郎作品集』（碌山美術館 2002）／『日本美術年鑑』昭和46年版（東京国立文化財研究所 1972）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『創作版画誌の系譜』（三木）

北 富三郎（きた・とみさぶろう）

大阪の同心草舎によって発行された版画と歌の文芸同人誌『同心草』第8号（1926.7）に《無題》、第9号（1926.9）に《たまのり》と短歌、第10号（1926.11）には短歌「紅燈集」とその挿絵を凸版で発表する。【文献】『同心草』8・9・10（加治）

木田寛栗（きだ・かんりつ） 1875～没年不詳

1875（明治8）年5月22日東京に生まれる。本名田木司（田禾司、田木志とも）。日本画を荒木寛友に学ぶ。絵画趣味の普及から1902年『絵画之菜』、『日本画手引草』、『日本画独習画帖』など日本画入門書を松声社から発行。その後1903年頃より大日本絵画講習会を興し、絵画の通信教育を開始する。1903年より日本画向け『絵画講習録』を、1905年洋画向け『洋画講義録』を刊行。通信教育は活況を呈し、1916年頃まで続けられた。これらの講義録に木版木の絵手本を木田自身も多数描いた。第1回からの受講生には洋画家の中村彝がおり、講習会の第8回懸賞絵画（1906）で水彩画《春の戸山》が一等賞を受賞している。1915年『懐中書画便覧』（1942年版まで）、1932年『大日本画家名鑑』（1943年版まで）などロングセラーの美術書を出版。傍ら洋画材料品や書画幅の販売などを手掛けた。戦後の活動については不明。【文献】及川益夫『大正のカルチャービジネス』（皓星社 2008）（樋口）

木田八千代（きだ・やちよ）

1937（昭和12）年11月、東京の日本橋城東小学校で開催された日本橋区教育会主催による教師対象の木版画講習会に参加。その記念版画集『日本橋版画』創刊号（1937.12）に《百日草》、第2号（1938.1）に《えび》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

北尾修一（きたお・しゅういち）

文化学院美術部卒業後、専修科在学中に西田武雄が主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第31号（1935.5）にエッチング《窓より》を発表。なお、この作品は同号の作者紹介によると、エッチング制作の第二作目であることが記されている。【文献】『エッチング』31（加治）

北岡文雄（きたおか・ふみお） 1918～2007

1918年（大正7）1月11日、東京に生まれる。1935年（昭和10）暁星中学校卒業し、翌1936年東京美術学校油画科予科に入学。本科時代は藤島武二教室に学び、1939年には臨時版画教室で平塚運一の指導を受けた。この年日本版協会展に初出品し、恩地孝四郎を知った。以後も継続して出品。1940年春陽会会員だった水谷清の実家のアトリエに下宿、その縁で翌1941年に春陽会展に出品、以降も出品を続けた。1941年美校卒業。1942年平塚運

一主宰のきつつき会に参加、会員として第1回展に出品。また造型版画協会第5回展に「坂上登」の名で木版画を出品した。1943年日本版画協会展で褒状を受賞して会員となった。1944年藤田嗣治など多くの美術家が疎開した神奈川県藤野に疎開、隣家に住んでいた長与善郎の知遇を得る。また、この年恩地孝四郎の主宰する一木会に参加した。1945年1月「満洲」に渡り、当時「新京」にあった東アジア文化振興会（主任・旭正秀）に勤務し、ポスターの制作などにあたる。7月に現地召集されたが戦地に赴くことなく終戦を迎える。しばらく「新京」とどまった後、安東に移り、芦田伸介夫妻と知り合って行動を共にした。翌1946年東京美術学校で同期だった中国人の画家・田風に偶然会い、庇護を受ける。さらに中国木刻に触れて大きな刺激を受けた。この年安東を出発し、苦難を乗り越えて帰国。翌年より制作を再開し、帰国への道のりの体験をテーマに連作木版画『祖国への旅』（17点）を制作、中国木刻風の様式で表現した。戦後は日本版画協会と春陽会の会員として活動、個展やグループ展でも新作を発表した。1940年代終わりから1950年代前半は、一木会の会員だったこともあり恩地孝四郎の感化のもとで抽象的木版を制作したが、1955年のフランス留学を境に具象木版を制作、独自の写実的木版画世界を創出した。フランスから帰国した1956年から1958年にかけて北海道に居住。1964年（昭和39）にはフルブライト教育交流計画による交換教授としてアメリカに渡り、1966年に帰国。1971年にはソ日協会から招かれてモスクワで個展を開催。1980年には北京の中央美術学院で講演と木版画のデモンストレーションを行い、個展も開催した。1988年に町田市立国際版画美術館で、1993年に北海道立近代美術館で回顧展が開催された。2007（平成19）年4月22日東京で逝去。【文献】『北岡文雄木版画展図録』町田市立国際版画美術館、1988年／『北岡文雄の世界展図録』（北海道立近代美術館 1993）／『北岡文雄木版画60年展と造形の探求』（美術出版社 2003）（滝沢）

北川一雄（きたがわ・かずお）

鍋木清方の門人で、郷土会への出品歴を持つ。『中央美術』第6巻第4号（1920.9）の展覧会月評に、「北川一雄氏の数作はあまり冴えないものであるが中で戸山原の秋が稍々見るに足るものである」の展評がある。伊東深水、川瀬巴水に続く新人版画家として渡辺版画店より『竹林の初夏』（『竹藪』とも題される）（1919）を発表するが、知られているのはこの1作品のみ。生没年なども不明。なお、「北川一雄」の名で、「第四回槐樹社展所感」（『アトリエ』4-5 1924.4）、「郷土会第十二回展」（『美之国』3-4 1927.6）の展評の寄稿があるが、同一人かは未確認。【文献】『日本の版画 II』（千葉市美術館 1999）（樋口）

北川武城（きたがわ・たけしろ）

青森県師範学校5年生に在学中の1932年11月に開かれた青師図画展（4～6日 同校）に水彩画3点と木版画《人物》《風景》を出品。版画は師範学校で今純三に学ぶ。翌1933年3月同校を卒業。卒業後は、地元の小学校に勤めたようで、1952年2月の『小五教育技術』第5巻11号（小学館）に「学習指導の技術 算術科・わたくしたちの生活」[未見]、1953年1月の『小三教育技術』第6巻11号（小学館）に「単元学習算数科一冬の生活」[未見]を執筆している。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』（津軽書房 1979）／『国立国会図書館デジ

タルコレクション（雑誌）』（三木）

北川民次（きたがわ・たみじ） 1894～1989

1894（明治27）年1月27日静岡県榛原郡五和村に生まれる。1910年静岡商業学校を卒業し、早稲田大学予科に入学。1913年同校を中退し、翌年渡米。1918年から1920年にかけてアート・ステューデント・リーグに入り、ジョン・スローンに学ぶ。また、児童美術に興味を持つ。1921年メキシコに移り、聖画行商人となり同地を放浪。1924年国立美術学校に入学するも、特待生となり3ヵ月で卒業。翌年からトラルバム（～1932）やタスコ（1932～1936）の野外美術学校で児童の美術教育や作品制作に打ち込み、タスコでは校長を務める。その間、リベラ、オロスコ、シケイロスらと交際。1933年には藤田嗣治の訪問を受け、交友が始まっている。1936年帰国。藤田の紹介で1937年の第24回二科展にメキシコに取材した油彩画《メキシコ、タスコの祭日》など4点と《瀬戸の土工場》を出品。会員に推挙され、以後同展で活躍した他、聖戦美術展（1939）、新文展（1943）などにも出品した。また、1938年に久保貞次郎を知り、久保が栃木県真岡町で企画した児童画公開審査会（1938～1941）や福井市の児童画展（1941）の審査員を務めている。1943年愛知県瀬戸市安戸町に疎開。終戦後も同地に住み、戦後の二科会展（1946～1977）の他、美術団体連合展（1947～1951）、日本国際美術展（1952～1967）、現代日本美術展（1958～1969）などにも精力的に作品を発表。1978年4月には、二科会会長に就任するも9月に退会している。また、1951年名古屋市に北川児童美術研究所を設立。1952年に久保貞次郎らと「創造美育協会」を創立し、その活動に積極的に参加するなど、児童美術教育の実践者としても高く評価されている。版画は、メキシコ時代の1928年頃から制作を始め、作品数は1977年の時点で340点を超す（久保貞次郎編『北川民次版画全集 1928-1977』による）が、その多くは戦後の作品であり、版種も木版・石版・銅版・リノカット・ステンシルなど多種にわたっている。戦前の代表的な作品としては、版画集『瀬戸十景』（リノカット、1937）、《メキシコの浴み》《タスコの裸婦》（木口木版、1941頃）などが知られている。戦後は、1954年に久保貞次郎らによって企画された12人の洋画家による石版画集『Cercle de la Gravure du Japon』（明治書房 1955刊）や1957年に結成された「版画友の会」（大下正雄・今泉篤男・久保貞次郎ら）へ作品を提供した他、1957年に始まる東京国際版画ビエンナーレにも第1回展（1957）から第5回展（1966）まで連続して出品。また、版画の個展も数多く開催している。1989（平成元）年4月26日瀬戸市で逝去。著書に『絵を描く子供たち』（岩波新書 1952）『子供の絵と教育』（創元社 1953）『メキシコの誘惑』（新潮社 1960）などがある。【文献】久保貞次郎編『北川民次版画全集 1928-1977』（名古屋日動画廊 1977）／『北川民次展』図録（愛知県美術館 1996）／『日本美術年鑑』平成2年版（東京国立文化財研究所 1991）（三木）

北川萍水（きたがわ・へいすい）

→北川有三（きたがわ・ゆうぞう）

北川冬彦（きたがわ・ふゆひこ）

1927（昭和2）年開催の造型第3回展に一般公募出品者として、「北川冬彦」が《版画》を3点出品している。

雑誌掲載の展覧会評にこの作者に触れた記事がなく、この人物が詩人、映画評論家として活躍した北川冬彦（本名・田畔忠彦〔たぐろ・ただひこ〕1900～1990）と断定することは保留しておきたいが、同一人物である可能性は高い。北川はすでに1924年に安西冬衛らと創刊した詩誌『亞』でこの筆名を使っているし、造型第3回展開催の前年に出版した第二詩集『検温器と花』の装幀・挿絵制作を自ら行い、造形作品制作への意欲を見せているからである。同詩集の「後記」では「詩集『三半規管喪失』以後、明かに一転期が来た。主観の爆発から内潜へ。暗き文学から明るき文学へ。それから立体的構成へ」と書き、結成初期から明るく健康的な美術を目指していた「造型」グループとの指向性の一致も確認できる。詩人としても知られ、1930年に共に『詩・現実』を創刊する神原泰が「造型」の同人であったことも造型展出品との関係をうかがわせる。以下は詩人・北川冬彦の活動概要。滋賀県大津市に生まれる。東京帝国大学仏法科を卒業、次いで仏文科に学んだが中退。『亜』創刊の翌年処女詩集『三半規管喪失』（1925）を上梓。その後『検温器と花』（1926）、『戦争』（1929）を発行し、以後も多数の詩集を上梓した。1928年に『詩と詩論』に参加、シュールレアリスム運動に関わった。1920年代は短詩運動から新散文詩運動へと前衛詩運動を精力的に展開、マックス・ジャコブ散文詩集『骰子筒』（1929）の翻訳出版、アンドレ・ブルトンの『超現実主義詩論』（1929）の翻訳紹介なども手掛けた。新散文詩運動ののちは、シネ・ポエム論や新叙事詩運動などを提唱。しだいに左傾し『詩・現実』を創刊、別に『時間』『麵麩』などをおこした。第二次世界大戦後はネオ・リアリズム論を提唱した。【文献】『大正期新興美術資料集成』（国書刊行会 2006）／鶴岡善久編『北川冬彦詩集』（沖積者 2000）（滝沢）

北川 実（きたがわ・みのる）1908～1957

1908（明治41）年2月8日、現在の広島県府中市川面町に生まれる。1911年叔父の養子となり福岡に移る。1922年八幡製鉄所に製図工として入社。1925年上京。本郷絵画研究所に入り、二科会の松本弘二に油彩画を学び、1930年代には野間仁根に師事する。1926年第3回白日会展に油彩画《別邸のある風景》が初入選。以後、1927年の第2回1930年協会展・第3回造型展、1929年の第4回1930年協会展、1930年の第8回春陽会展、1932年の第2回独立展、1933年の第3回独立展、1936年と1938年から1943年の二科展（第23・25～30回展）などに出品し、1943年には二科会会友に推挙された。版画は、会員として名を連ねた1937年1月の第7回NOVA美術協会展に油彩画10点・素描2点とともに《漁村風景》（木版画か）を出品。また、1943年に日本版画奉公会会員となっている。1945年海軍に応召され終戦。戦後は郷里の広島県府中に移り、1946年彫刻家今城國忠らと「府中造形美術協会」を結成。1950年にかけて毎年展覧会を開催し、地方美術の再建に貢献。また、1947年からは毎年福山市で個展を開催している。1948年には旧制中学を卒業したばかりの高橋秀がアトリエに入り、出入りするようになり、画家を志す切っ掛けを与えたようであるが、1952年再上京。実業の日本社に勤務しながら制作を続けたが、1957（昭和32）年3月21日東京で逝去。【文献】『北川実回顧展』（福山市美術館 2001）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研

究所 2006）／『日本版画』126（三木）

北川有三（きたがわ・ゆうぞう）1905～没年不詳

1905（明治38）年10月京都市に生まれる。本名は雄三。旧姓は稲垣。長兄は日本画家稲垣伸静（本名・広太郎）、次兄は染色家稲垣檢次郎、弟は版画も手掛けた稲垣耕四郎（1911～1943）。1925年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。1928年1月の第8回日本創作版画協会展に木版画《御茶の水風景》、翌1929年1月の第9回展に《花》《大阪風景》を出品。2月の京都創作版画会第1回展に《雪の八瀬》《洛北風景》《落葉拾ひ》《落日》を出品している「北川萍水」は同人であろう。武井武雄の主宰する「樺の会」の第11回（1945）と第12回（1946）にも参加。当時の住所は、京都市右京区川島北裏町57で、稲垣檢次郎と同じである。また、1966年4月の『染色工芸』第14号・稲垣檢次郎先生特集号〔未見〕に「樺」を寄稿している。【文献】『同窓生名簿 明治13～昭和46』（京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971）／『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／岡田毅『京都における創作版画運動の展開』『京都府総合資料館紀要』12（1984）／市道和豊『〔軌跡の成立〕一樺の会昭和21年一（芸術集団の戦中・戦後）』（室町書房 2008）／乾由明編『稲垣檢次郎作品集』（求龍堂 1980）（三木）

北沢邦雄（きたざわ・くにお）

長野県下の教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第2号（1935）賀状号に《猪》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

北澤収治（きたざわ・しゅうじ）1890～1960

1890（明治23）年10月29日長野県北佐久郡南大井村に生まれる。風景版画を得意とし、日本創作版画協会・日本版画協会の会員として活躍。信州の創作版画運動の発展にも寄与した。旧姓は柏木。1897年に森山、1929年からは北澤姓となる。名は収二か、1927年から収治を使っている。1897年に横浜の商家森山家の養子となり、のちに横浜商業学校に学ぶ。版画は、1912年に細井種生につき石版画を習得した。1916年の第3回日本水彩画展、翌1917年の第4回二科展に入選した後、1919年の第1回日本創作版画協会展に木版画《炎》が初入選した。翌年養家を出て、木曾の福島町立尋常高等小学校の代用教員となり、中西義男らを知る。1921年の第3回日本創作版画協会展に《故郷風景》《野良犬》《私の居る風景》が再入選。その後は1929年の第9回展まで連続して出品。1927年には会員に推挙されている。その間、1924年に教職を辞して再上京したが、翌年再び長野県下の小学校の教員に戻り、後に長野県立長野商業学校（1939）、長野市立実科女学校などでも教えている。1929年より北澤姓となり、1931年の日本版画協会の創立に会員として参加。同年の第1回展に石版画《収穫》を出品。以後、1943年の第12回展まで、第2・6・9回展を除き出品し、日本版画協会の活動を支える中堅作家として活躍した。また、春陽会の第5回展（1927）・第9回展（1931）・第11～13回展（1933～1935）、国画会の第15～18回展（1940～1943）にも出品している。公募展以外の活動としては、1922年に関西学院の美術部「弦月会」が主催した創作版画展（神戸）に木版画《たそがれ》《私の居る風景》を出品。1924年には神戸の山口久吉の主宰する版画誌『HANGA』第1輯（1924. 2 版画の家）に《冬日》を発表。第4・6・9・

10・14 輯 (1924. 12 ~ 1928. 11 ただし、第9・10 輯は合併号) にも作品を発表。1928 年頃には版画の家より『森山収治版画集』(木版画《小諸の冬》《春日清遊》《池上村》の3点組)を出版した。また、1932 年には東京の料治熊太の主宰する版画誌『版芸術』第6号(1932. 9)に木版画《子供》を発表。第9・11・15・21号(1932. 11 ~ 1933. 12)にも作品を発表した。地元長野での活動としては、1928 年に中西義男らと「淡交会」を結成し、第1 回展に木版画《夕日の丘》など6点と油彩画・素描を出品。1934 年の第6 回展まで開催したようである。1934 年に須坂の小林朝治の誘いで版画誌『櫟』に参加し、第3 輯(1934. 7)に《北国街道》を発表。以後、第5・7・8・10・12 輯(1937)に作品を発表。1936 年には北沢博生・小林朝治らと「信濃創作版画協会」を結成し、展覧会を開催した。また、1939 年の小林朝治の逝去に際しては、同年9月の『日本版画協会会報』第31号に追悼文を寄せている。1943 年日本版画奉公会会員。1945 年にはすべての教職をやめ、長野県小県郡中塩田の自宅に戻り、農耕生活に入ったが、翌1946 年に長野地方務局塩田出張所雇員となり、10 年間勤務。この間、日本版画協会展への出品はなく、1959 年退会。1960 (昭和35) 年4月3 日長野県小県郡塩田町で逝去。1990 年8月に最初の遺作展『生誕100 年、没後30 年記念 北沢収治版画展』(こもろ東急百貨店)が開催されている。【文献】『生誕100 年、没後30 年記念 北沢収治版画展』(北沢収治版画展実行委員会 1990) / 『長野県美術全集<第8 巻> 信州の水彩画と版画芸術―斬新な才気と多彩な美術運動』(郷土出版社 1993) / 『日本版画協会会報』11(1936.6)・31(1939.9) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『日本版画』126 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

北沢博生 (きたざわ・ひろお)

1923 (大正12) 年長野県立須坂高等女学校に勤務。1930 年構造社第4 回展に油彩画《樹間より》が初入選。以後、1934 年の第8 回展(第5・7 回展は「博」の名で)まで油彩画を連続して出品。版画は1933 年夏に須坂で開かれた平塚運一の版画講習会を切っ掛けに始めたようであり、講習会参加者による「信濃創作版画研究会」の結成に参加。同会が刊行した版画誌『櫟』第1 輯(8月発行か)に《外波風景》を発表。以後、第6・9 輯を除き、1937 年の第12 輯まで作品を発表した。また、同年(1933)に小林朝治・松原忠四郎らと美術団体「十人社」を結成し、1939 年頃まで展覧会を開催。1936 年には「信濃創作版画研究会」を発展させ、北沢収治・小林朝治らと「信濃創作版画協会」を結成し、展覧会を開催している。一方、中央展である日本版画協会展には、1935 年の第4 回展に木版画《造船所の秋》《千曲河畔》を出品し、初入選。翌1936 年の第5 回展(1936)に《相川風景》《小木風景》、1937 年の第6 回展に《三津風景》(「博」の名で)が入選した。また、1938 年の造型版画協会第2 回展にも《郷津風景》《街裏の雪》(「博」の名で)を出品している。その後の活動は不明であるが、1939 年9月の『日本版画協会会報』第31号に同年8月5日に逝去した小林朝治の追悼文を寄せている。また、1943 年7月の『日本版画』第126 号の「日本版画報公会新会員」に名前が掲載されているが、所属は以前の「須坂高等女学校」のままであった。【文献】『日本版画協会会報』11 (1936.6)・31 (1939.9)

／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『日本版画』126 / 『創作版画誌の系譜』(三木)

北澤楽天 (きたざわ・らくてん) 1876 ~ 1955

1876 (明治9) 年7月20日埼玉県足立郡大宮宿(現・うらわ市大宮区)にある大宮有数の名門北澤家に生まれる。本名保次。生後間もなく、父保定が内務省勤務のため東京に移り、神田錦町小学校に入学(錦華小学校との説もある)、図画を得意とした。その後大野幸彦主宰の大幸館に入り、洋画を学ぶ。1896 年横浜でアメリカ人 E・B・ソーンが発行する週刊英字新聞ボックス・オブ・キューリオス社に絵画記者として入社。オーストラリア人の漫画家フランク・A・ナンケベルから欧米の漫画技法を学ぶ。その才能を認めた福沢諭吉の招きで1899 年時事新報社絵画部社員となり、『時事新報』日曜附録に連載の「時事漫画」を手掛けて評判を得る。この頃より「楽天」と名乗る。1905 年便利堂(京都)創業者の中村弥二郎が東京に設立した出版社有楽社の後援を受けて、『時事新報』に執筆の傍ら、楽天主筆による社会風刺漫画誌『東京パック』を創刊。石版多色刷の大判雑誌は創刊直後から評判となり、最盛期には5 万部(6 万部、10 万部ともいわれる)を超えることもあったという。同誌の募集広告には多くの無名の青年画家たちが集まり、後に画家や彫刻家として大成する山本鼎、坂本繁二郎、川端昇太郎(龍子)、石井鶴三、太田三郎、近藤浩一郎らが漫画を描いた。隆盛を誇った『東京パック』だが、後援の有楽社の借財が原因で、楽天の『東京パック』は第7 巻第18 号(1911.6)で終刊となる。『東京パック』を離れた楽天は、自ら『楽天パック』『家庭パック』を創刊、石井鶴三、坂本繁二郎、前川千帆、下川凹天らが筆を振るうが長くは続かず廃刊。再び『時事新報』を漫画活動の拠点として、1921 年『時事新報』の日曜漫画版『時事漫画』が創刊され、主筆として活躍するが、他紙の参入で楽天人気も次第に翳りが見え始め、1932 年30 余年勤めた時事新報社を退社。その後は自宅に「三光漫画スタジオ」を開設して後進の育成に力を注いだ。1943 年推されて日本漫画奉公会会長となる。戦後は疎開先の宮城県から郷里の大宮に戻り、「楽天居」と称した自宅で日本画を描いて過ごした。1955 (昭和30) 年8月25 日逝去。ちなみに『東京パック』発売元の有楽社は、美術雑誌『平旦』第1号~第3号(1905.9 ~ 11)の発売元。小杉未醒、山本鼎、石井鶴三、鹿子木孟郎などが『平旦』に漫画を描き、楽天も美術雑誌『方寸』第3 巻第2号(漫画特別号)に《AITE WO MINUTAME NO WATABOSI》(石版またはジंक版)を描いている。【文献】『北沢楽天略歴』(北沢楽天先生顕彰会 1964) / 『北沢楽天画集』(番町書房 1971) / 『日本の版画 I』展図録(千葉市美術館 1997) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

北島徳誠 (きたじま・とくせい)

長野県上水内郡長沼村(現在は長野市)に生まれる。長野県師範学校二部1 年に在学中、同校生徒による版画誌『樹氷』第1号(皇紀2598 年版)(1938)に《裏門》を発表。1940 年同校を卒業。1950 年当時上水内郡神郷中学校に勤務。【文献】『卒業生名簿 昭和25 年』(信州大学教育学部本校 1950) (加治)

木谷千種 (きたに・ちくさ) 1895～1947

閨秀日本画家。旧姓・吉岡。1895(明治28)年2月17日大阪市北区堂島浜通2丁目1番地に生まれる。父は吉岡政二郎。本名は英子。唐物雑貨商の祖父母の許で育てられ、1907年から1909年までの2年間、洋画を学ぶために米国シアトル市に過ごす。帰国して府立清水谷高等女学校在学、このころに花鳥画の深田直城に師事、1913年同校3年生で東京に転居し、池田蕉園に3年間学ぶ、その後大阪へ帰り野田九浦、北野恒富に師事した。1915年、第一回大阪美術展に《新居》、文展出品《針供養》が「吉岡千種」名で初入選。1919年には京都の菊池契月入門。1920年4月、近松研究者の木谷蓬吟と結婚し、描く題材にも芝居、浄瑠璃にと影響を受ける。同年女性のための画塾「八千草会」主宰し後進の指導にあたる。帝展の入選の常連。版画には1922年～1925年頃の《心中宵庚申のお千代》(木谷蓬吟編『大近松全集』附録版画)がある。1947(昭和22)年1月24日逝去。【文献】『女性日本画家 木谷千種—その生涯と作品』(池田市立歴史民俗資料館 2002)(岩切)

北野恒富 (きたの・つねとみ) 1880～1947

日本画家(美人画)、浮世絵系挿絵画家、ポスター(絵ビラ)画家としても知られる。1880(明治13)年5月5日金沢市十間町生まれ。本名は富太郎。1892年小学校卒業以降の十歳代は、木版書画版下の彫刻修業を経て、北国新聞の彫刻部に勤務。1898年4月に稲野年恒を師事入門。1901年10月、大阪新報社に入社し挿絵を描く。1910年文展で《すだく虫》初入選。翌年には《日照雨(そばえ)》で文展三等賞。大阪美術会を結成し次第に大阪画壇の中心的な活動を展開。1914年再興院展《願の糸》入選。1915年文展で《暖か》褒状。1917年に日本美術院同人となり、以後院展出品に力を入れる。1947(昭和22)年5月20日、大阪府中河内郡三野郷村字玉井の自宅で逝去、享年68。墓は奈良市の霊山寺、戒名「天真院釈齒玄恒富居士」。門下からは中村貞以、木谷千種、島成園等を輩出。版画には1916年異画会出品の《舞妓》、《湯上り》。1918年『廓の春秋』4点(《秋く南地 湯上り》、《春く新町 稽古の間》、《夏く堀江 夕ぐれ》、《冬く新地 鏡の前》)、限定50部、摺は田所力松、中島青果堂発行。1920年『新錦絵帖・浮世絵の顔』12図。1921年頃(木谷蓬吟編『大近松全集』附録版画)《冥途の飛脚 梅川》(彫山岸主計・摺西村熊吉)。1922年《口紅(三月)》(新浮世絵美人合刊行会・人情本刊行会)。1925年《鷺娘》(根津清太郎版、彫山名良光・摺松野活水)等。美人画ポスターの代表作に1914年《サクラビール》(アルミ平版描き版)、1916年《たかしまや飯田呉服店・京舞妓若松》(石版)、1922年頃《菊正宗》(オフセット)等。その他、口絵、表紙絵等の仕事も多い。【文献】橋爪節也編『年譜』『北野恒富展』図録(東京ステーションギャラリー他 2003)(岩切)

北村今三 (きたむら・いまぞう) 1900～1946

1900(明治33)年神戸市に生まれる。1914年京都市立第二商業学校に入学するも、翌年関西学院中等部第2年級に編入学。1919年関西学院高等部商科に進学。在学中、絵画部「弦月会」に参加し、木版画を制作。翌年春村ただを(本名・田邊唯雄)が入学すると交遊し、生涯の友になる。1921年第3回日本創作版画協会展に《風景》《路傍》が初入選。翌1922年神戸で開かれた弦月会主催の創作版画展にも出品した。1923年関西学院高等部

商科を卒業。卒業後の就職先は不明(1928年頃には電力会社大手の宇治川電気に勤務)であるが、版画制作を続け、同年(1923)の第5回日本創作版画協会展に《或る男の顔》など4点が再び入選。以後、1929年の第9回展まで連続して出品。その間、1928年の第6回春陽会展にも《神戸風景》が入選している。1931年に結成された日本版画協会へは、第1回展から出品し、《御影停留所》が入選。1932年会員に推挙され、同年の第2回展、その後の第4・5・7回展(1935・1936・1938)に出品。同会の中堅作家として活躍し、1938年に計画された『新日本百景版画』頒布事業にも参加し、《阪神パーク》を担当した。また一方では、神戸を中心とした創作版画運動にも深くかかわり、多くの足跡を残している。山口久吉の主宰する版画誌『HANGA』第2輯(1924.5 版画の家)に《打出の近郊》を発表。その後も、第7輯(1925.10)、第11輯(1926.11)、第15輯(1930.3)に作品を、第13輯(1928.3)に作品図版を発表し、1926年に版画の家より『北村今三作品集』(木版画7点組、未見)を出版している。1929年には川西英、春村ただを、菅藤霞仙、福井一郎と版画グループ「三虹会」を結成し、同年の第1回から1936年の第6回展(最終展)まで出品。66点の作品を発表した。また、1930年に結成された兵庫県美術家聯盟にも参加。1931年の第1回展に《港風景》《寝屋川風景》を出品。その後は、1938年の第16回展まで出品したようである。この他の動きとしては、1933年には京都の武田新太郎・大阪の前田藤四郎らと版画誌『黄楊』(発行地は大阪)を創刊している。1943年日本版画奉公会会員。1946年兵庫県尼崎市で逝去。【文献】『川西英と神戸の版画—三虹会に集まった人々—』図録(神戸市立小磯記念美術館 1999)／『関西学院の美術家—知られざる神戸モダニズム—』図録(神戸市立小磯記念美術館 2013)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(三木)

北村謹次郎 (きたむら・きんじろう) 1904～1991

1904(明治37)年奈良県吉野に生まれる。1928年京都大学経済学部を卒業。家業の林業を営む実業家であり、また茶人としても知られ、1977年には自身が蒐集した古美術や茶道具を保存・展示する財団法人北村美術館(京都市)を開いている。徳力富吉郎に木版画を学び、徳力の主宰する丹緑会編の『版 小品集』(発行年不詳)に作品を発表。また、1932年5月の第3回京都工芸美術展に木版画《静物》、6月の第2回日本版画協会展に《グランド風景》、11月の第1回関西創作版画展(京都府植物園・大正記念館)に《グランド風景》、1933年1月の京都創作版画会第3回展に《静物》《運動場》、9月の第3回日本版画協会展に《花ト人形》を出品した。【文献】岡田毅『京都における創作版画運動の展開』『京都府総合資料館紀要』12(1984)／福永重樹『京都の創作版画家長永治良について』『サントリー美術館二十周年記念論集』1982(三木)

喜多村富貴 (きたむら・ふき)

関谷忠雄主宰の牧神詩社同人。同社発行の詩と版画の同人誌『牧神』第4号(1930.7)に《風景》と詩を、第5号(1930.8)から第8号(1930.11)までは毎号に詩を発表している。また、第2号(1930.2)の編集者に名を連ねているものの、同誌の創刊号や第3号が未確認であるこ

と第2号も部分的な写真での確認のため、編集発行においての喜多村の役割は不明である。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

北村又次（きたむら・またじ）

1932年3月25日～29日開催の毎日新聞京都支局主催、京都市教育部・京都創作版画協会（1929.1設立）後援の全市学童創作版画実技講習会の指導者のひとりとして大月文一らとともに名を連ねる。当時、正親校教諭で、京都創作版画協会会員。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12（京都府立総合資料館 1984）（樋口）

北山清秋（きたやま・せいしゅう）

1936年4月に満州の大連へ渡り、当地から西田武雄が主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第57号（1937.7）に「胡藤の蔭」、第77号（1939.3）に「漫筆」と題した小文を寄稿。その寄稿文には「油絵も初め、エッチングも覚える。これ皆今先生の薫陶に依るんだが下手くそなりに絵らしい絵を描ける様になったので有る」と書かれており、青森のエッチャー今純三に師事し、版画制作を行なったと考えられるが、作品は確認されていない。【文献】『エッチング』57・77（加治）

北脇 昇（きたわき・のぼる） 1901～1951

1901（明治34）年6月4日名古屋に生まれる。8歳の時、父昇が単身朝鮮に渡り、京都の叔父広瀬満正（元貴族議員、実業家）のもとに移る。1917年私立同志社中学校中退。1919年鹿子木孟郎画塾に入塾。1921年同塾を退塾。徴兵のため一時画業を中断するが、1930年津田青楓画塾に入り、二科展に出品。1933年8月津田洋画塾解散後は、同年10月に独立美術京都研究所を開設し、独立美術展に出品する。1935年独立美術京都研究所の有志で新日本洋画協会を結成。1938年独立美術協会にシュールレアリスム的な作品を発表していた浅原清隆、糸園和三郎ら若手の画家たちが結成した創紀美術協会に参加。1939年発展的解消による福沢一郎らが主導の美術文化協会結成に合流し、日本のシュールレアリスムの草分けのひとりとなる。戦後は、1947年日本アヴァンギャルド美術家クラブ、京都新美術人協会の結成に加わり、1948年日本美術協会京都支部長を務める。1949年第9回美術文化協会展に油彩画《クオ・ヴァディス》（何処へ行く）を出品、新たな絵画を模索の途上、1951（昭和26）年12月18日京都で逝去した。版画の制作は、黒田秀道宛ての木版〔『賀状』〕（1931）。1936年8月8・9日開催の京都エッチング協会主催（中井平三郎幹事 西田武雄講師）のエッチング講習会に参加して須田國太郎らと共に会員に名を連ね、翌1937年8月開催の京都講習会にも小牧源太郎らと参加。1936年から1938年にかけて、《『裸婦』》《『風景』》の具象作品から《探索者》《孤独な終末》といったシュールな油彩作品に倣った少なくとも9点のエッチング作品（手彩色の作品も見られる）を制作する。その他フロッタージュによるモノタイプ《月1》《月2》やカラージュ、デカルコマニーなどシュールレアリスム作家に特有な技法による作品の制作がある。【文献】『エッチング』47・58・59／『北脇昇展』図録（東京国立近代美術館ほか 1997）／『日本の版画 1931 - 1940』展図録（千葉市美術館 2004）（樋口）

吉川霊華（きつかわ・れいか） 1875～1929

1875（明治8）年5月4日東京湯島に生まれる。本名は準（ひとし）、通称三郎。幼少より詩文、作画に秀でて神童と称せられる。小学校を4年で辞め、以降は学校に通うことなく独学。8歳の時、楊州周延に浮世絵の手解きを受け、「延景」の画号を受ける。狩野派や橋本雅邦に日本画、小山正太郎に洋画を学ぶが続かず。有職故実の研究家の松原佐久を通じて、幕末期の復古大和絵の絵師冷泉為恭に私淑。19歳の時に故実家関保之助を知る。この頃から「霊華」と号し、大和絵の制作を続ける。日本美術会展に出品し受賞を重ね、鏑木清方の烏合会に参加。1911年第5回文展に《菩提達磨》を初出品し褒状を受けるが、以後15年間官展へは出品せず。1915年田口掬汀が主宰する『中央美術』の編集同人となり、健筆をふるう。1916年田口掬汀の斡旋で鏑木清方、平福百穂、松岡映丘、結城素明らと金鈴社を結成、1922年の解散まで出品を続けた。1926年第7回帝展に審査員として、15年ぶりに官展出品した《離騷》が話題となる。古画への深い造詣と有職故実に精通し、美しい細線による人物画を得意とした。1929（昭和4）年3月25日逝去。版画は、1915年大札記念の御大典に際し、逓信省発行の木版記念絵葉書の下図《太平楽之図》を描くほか、木版画集《義士大観》（義士会出版部 1921）に《一幅の戯画》1図との制作がある。【文献】『吉川霊華・みやびの世界』図録（サントリー美術館 1983）／『京都古書籍・古書画資料目録』（2007）／『吉川霊華展』（東京国立近代美術館 2012）（樋口）

杵淵今朝夫（きねふち・けさお）

長野県下の教師による下水内郡手工研究会が発行した版画誌『葵』第1号（1934.9）に《カリウド》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

木内一男（きのうち・かずお）→中田一男（なかた・かずお）

木内 克（きのうち・よし） 1892～1977

1892（明治25）年6月27日水戸市に生まれる。1907年県立水戸中学校に入学するが、1912年5年次卒業を目前にして中退、上京して水戸出身の東京美術学校彫金科教授海野美盛の内弟子となる。1914年朝倉文夫主宰の彫塑塾に入門。1916年第10回文展に彫刻《平古》が初入選。その後も文展、帝展に入選を繰り返す。1921年パリに渡り1922年よりグランド・ショミエール研究所に3年間通う。約1年間ブルデルの指導を受ける。この頃、藤田嗣治、原勝郎、岡鹿之助らと親交。1930年頃よりギリシャのアルカイック彫刻に傾倒し、テラコッタの技法を修得して、1935年帰国。1937年第23回二科展に《女》《鬼の首》を出品して会友に推挙されるが、1941年脱退、同年文展無鑑査となる。戦後は1948年朝井閑右衛門、須田剋太ら光風会中堅作家たちが創設した新樹会に招待され、以後晩年まで出品を続ける。1951年新樹会会員。第3回毎日美術賞（1951）、第5回現代日本美術展優秀賞（1962）、第1回中原悌二郎賞（1970）など受賞。1977（昭和52）年3月8日逝去。版画の制作は、在仏時代、「日本」、「PARIS」の文字が背景に描かれた木版画《婦人像》2点（1927頃）を制作。1929年（1930年の説もある）に大判の石版画《猫》を制作（日本人会やザック画廊で開催された在パリ日本画家第1回展に石膏板を用いた大判版画を制作したとの記録があり、《猫》がこの作品ではないかと思われるが、未確認）。戦

後は1952年タケミヤ画廊でリトグラフ・デッサン展に《かがむ女》《坐る女》(版種未確認)を制作。1956年第1回版画友の会頒布会(美術出版社)に《手をついた裸婦》《腰を下ろした裸婦》(石版単色)と《アザミと裸婦》(版種未確認)、1959年版画友の会に《前かがみ》《ひざに手をやっている裸婦》(石版単色)、1976年『四季平安万事如意』シリーズ(リトグラフ全10点)などの制作がある。【文献】『原色浮世絵大百科事典』第10巻(大修館書店1981)／『生誕百年記念 木内克のすべて—生命とロマンの交響—』図録(練馬区立美術館 1992)／『茨城県立近代美術館所蔵作品図録』(1997)／「木内克」(独立行政法人国立美術館・所蔵作品 インターネット検索)(樋口)

木下 繁 (きのした・しげる) 1908～1988

1908(明治41)年4月25日和歌山県有田郡湯浅町に生まれる。1926年和歌山県立耐久中学校を卒業。1928年東京美術学校彫刻科塑造部に入學。建島大夢に学ぶ。また、校友会版画部の活動にも参加し、1930年11月に校内で開かれた「[椎の樹]版画展」に木版画1点を出品した。1933年同校を卒業。研究科に進み、1935年に同科を修了しているが、公募展へは在学中から出品し、1930年の第11回帝展に彫刻《女の顔》が初入選。以後、帝展・新文展・日展に彫刻を出品し、1938年・1939年の新文展と1947年・1951年の日展で特選を受賞。1958年に日展会員、1977年に日本芸術院会員となった。彫刻以外の活動としては、1939年に自由学園幼児生活団の図工講師に就任し、児童画教育に関わるようになり、1952年には久保貞次郎の提唱した「創造美育協会」の発起人となっている。版画に関しては、1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレに銅版画《作品A》《作品O》を出品している。また、川村学園短期大学講師(1959～1961)、神戸大学教育学部講師(1961～1972)、武蔵野美術大学彫刻科講師(1964～)を経て、1972年より武蔵野美術大学彫刻科教授となり、後進の指導にもあたった。1988(昭和63)年8月4日東京都で逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『木下繁彫刻集』(六藝書房 1988)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『日本美術年鑑』平成元年版(東京国立文化財研究所 1990)(三木)

木下 茂 (きのした・しげる)

東雲堂書店の西村辰五郎が若山牧水に編集を依頼して創刊した短歌雑誌『創作』(I期1910.3～1911.10)に表紙絵や木版による扉絵や欄画、カットなどを描く。【文献】寺口淳治・井上芳子編「大正期の雑誌における版表現」『大正期美術展覧会の研究』(東京文化財研究所 2005)(樋口)

木下秀一郎 (きのした・しゅういちろう)

1896(明治29)年福井県に生まれる。1899年に東京に移る。1918年名古屋で北光社を立ち上げ第1回展を開催、新傾向の作品を出品した。1920年日本医学専門学校(現・日本医科大学)に在学中に未来派美術協会第1回展に出品、その後来日したダヴィッド・ブルリユーク、ヴィクトル・パリモフと知り合いロシア未来派に感化される。1921年日本医学専門学校を卒業。この年、普門暁に代

わって未来派美術協会第2回展を組織、巡回先の名古屋会場では「未来派の美術に就て」と題して講演をおこなった。1922年福井に移り同県衛生課に勤務する一方で、土岡秀太郎らと北荘画会を設立した。1923年ブルリユークとの共著『未来派とは?答へる』(中央美術社)を刊行。1924年「秀・木下氏個人展覧会」と講演会を金沢と福井で開催。またこの年、中心となって三科を結成し、翌1925年の第1回展(会員展)、劇場の三科、第2回展(公募展)に会員として出品・出演した。三科解散後は美術運動から遠ざかり医師の仕事に専念したが、1938年頃から歌舞伎舞台スケッチなども制作した。版画の制作はわずかだが、1918年10月に名古屋で開催の北光社洋画展覧会に油彩画とともに版画8点を出品していることが確認できる。また1929年に、新潟美術社から発行した版画集『版画之新潟』に木版画《山之下臨港台の春》を制作している。1991(平成3)年逝去。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006)／『「未来派の父」露国画伯来朝記!!—ブルリユークと日本の未来派—展図録』(西宮市大谷記念美術館 1996)(滝沢)

木下孝則 (きのした・たかのり) 1894～1973

1894(明治27)年3月24日東京市四谷区に生まれる。学習院中等科時代(1906～1914)に叔父児島喜久雄(西洋美術史家)の影響により、絵画に興味を持つ。1918年京都帝国大学法科大学政治経済学科、翌年東京帝国大学文科大学哲学科をそれぞれ中退。画家の道を進み、1921年第8回二科展に初入選し、渡仏。1923年に帰国し、1924年・1925年の二科展で樗牛賞、二科賞をそれぞれ受賞。1926年には前田寛治・佐伯祐三らと「1930年協会」を結成し、昭和の洋画壇に一石を投じた。その後、春陽会会員(1927～1930)、再渡仏(1928～1935)、サロン・ドートンヌ入選(1930)、二科会会員推挙と辞退(1936)などを経て、1936年に弟の木下義謙らと「一水会」の結成に参加。以後、同展を代表する作家として活躍。戦後は日展にも出品するようになり、日展審査員・評議委員なども務め、穏健な写実による夫人像やバレリーナを描いた。版画は、学習院中等科時代に児島喜久雄らと銅版画を手掛けたことがあり、バーナード・リーチが1909年から翌年にかけて上野の自宅で開いた銅版画の講習会に参加した可能性も高い。その後中断があり、1936年の『エッチング』第44号(1936.6)に「研究所製エッチングプレッス所有者」として紹介されているが、制作には至らず、1938年になって一水会編の雑誌『丹青』第1巻第3号(1938.11)にエッチング《読書》と「私のエッチング」を発表した。その文中で木下は、「西田[武雄]氏からエッチングのプレスを買ひ、一通り道具を揃へてやり始めたのであるが、やつてみると実際には全くの素人で、以来三年、エッチングには生意気になつてゐるためか、一枚も出来上らなかつたのである」と述べている。この《読書》は、『エッチング』第73号(1938.11)に作品図版が紹介され、1940年の日本エッチング作家協会の主催した第1回日本エッチング展にも出品された。この他、現在確認できる木下の版画としては、石版画《ほおづえ》(制作年不詳)、2008年の「木下孝則展」(横浜美術館)に出品された木版画《エウロベ》(制作年不詳)などがある。1973(昭和48)年3月29日横浜市で逝去。【文献】『昭和の気品、横浜の洋画家 木下孝則展』図録(横浜美術館 2008)／『丹青』1～3(1938.11)／『エッチング』44・73・96(三木)

木下俊範 (きのした・としのり)

1919～20年頃に刊行の楽譜『暮の旅』に木版表紙絵を制作。【文献】『山田書店新収目録』40(2000.4) (樋口)

木袋朱泥 (きぶくろ・しゅでい)

東京の料治熊太が発行した版画誌『白と黒』第19号(1931.11)に《衛兵》、第21号(1932.2)に《春》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

木俣 武 (きまた・たけし) 1908～1975

1908(明治41)年4月4日愛知県に生まれる。『コードモノクニ』『ひかりのくに』『キンダーブック』など絵本雑誌や児童書、教科書の挿絵など童画家として活躍する一方、セロファン影絵の普及にも尽力する。日本文化協会賞、日本童画会奨励賞(1951)など受賞。東京吉祥寺の朴の会が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《秋の青梅街道》を発表。同誌には文学や芸術の関係者が多く参加している。1975(昭和50)年に逝去。【文献】『むさしの風景』1 / 『20世紀日本人名事典』(日外アソシエーツ 2004) (加治)

木村 新 (きむら・あらた)

神戸・版画の家の山口久吉は1924年に創作版画集『HANGA』(1924～1930)全16号を発行するが、1925年にはその姉妹編とも言える学童の作品のみを扱った『HANGA 児童作品集』を刊行する。当時尋常小学校3年生だった木村はその第1号(1925.6)に《枯木》を発表するが、同誌は1号のみで休刊となってしまう。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

木村鑛吉 (きむら・こうきち)

西田武雄講師による慶応パレット倶楽部講習会(1935.11.7)に参加。但しエッチング作品の制作の有無は不明。当時、慶応義塾普通部学生。【文献】『エッチング』38 (樋口)

木村五郎 (きむら・ごろう) 1899～1935

1899(明治32)年5月5日東京市神田区に生まれる。1915年東京高等工業学校附属工手徒弟学校に入学。その後、山本瑞雲に就いて木彫を学び、1918年からは石井鶴三に師事。1920年鶴三の推薦で日本美術院研究会員となり、喜多武四郎を知る。翌1921年の第8回再興日本美術院展に木彫《簸の川上に於ける素盞雄命》《習作》が初入選。以後、第11回展(1924)を除き、1934年の第21回展まで連続して出品。その間、1924年院友に推され、1927年日本美術院同人となっている。また、1926年頃から山本鼎の農民美術運動に協力し、囑託となり、講習会(例:京都府宇治町茶摘人形講習会、1927年2月開催)などで木彫を指導した。1930年には大内青坡・大内青圃・喜多武四郎らと「大乘美術会」を結成。1935(昭和10)年7月に同会とホクト社とが合流した「新興美術家協会」の結成にも協議員として参加するも、8月1日に急逝した。版画は1932年頃に始めたようで、『版画CLUB』第4年第3号(1932.3)の「版画家の消息と近況」に「▲木村五郎氏……版画の創作を初めたるもまだ発表するに至らない由」と紹介されているが、同年の『版藝術』第9号「全日本版画家年賀状百人集」(1932.12)に木版年賀状が収載されている。また、1935年の新興美術協会第1回展の遺作特別陳列には、彫刻・スケッチなどとともに版画8

点が展示された。【文献】『版画CLUB』4-3(1932.3) / 『昭和十年度新興美術家協会出品目録』(1935) / 『大正理想主義の煌めき 戸張孤雁とその仲間たち』(礒山美術館 2000) / 千田敬一『「これは彫刻になっております」一木村五郎の彫刻とその生涯一』(ピットウソリューション 2005) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』(三木)

木村文吉 (きむら・じょうきち)

東京の料治熊太は版画誌『版芸術』(1932～1936)全58号を発行。その第18号(1933.9)全国郷土玩具版画集に《鯛車と鯛》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

木村正三 (きむら・しょうぞう)

西田武雄講師による慶応パレット倶楽部講習会(1935.11.7)に参加。但しエッチング作品の制作の有無は不明。当時、慶応義塾普通部学生。【文献】『エッチング』38 (樋口)

木村荘八 (きむら・しょうはち) 1893～1958

油彩画、日本画、特に挿絵画家、風俗史家・随筆家としても知られ、版画制作にも携わっている。1893(明治26)年8月21日東京に生れる(牛肉店「いろは」の両国吉川町第8支店で、木村荘平の第8子)。1911年に葵橋洋画研究所(旧白馬会研究所)に学び、岸田劉生と交流。1912年にはフェウザン会結成に参加、1915年草土社結成に参加。1918年の第5回再興日本美術院展で犇牛賞受賞。1922年には春陽会設立に客員参加、2年後に正会員となり主に春陽会で活躍。1924年7月の報知新聞連載・白井喬二「富士に立つ影」以降で、河野通勢の勧めで挿絵版下絵描きに関心を持ち活発化、装幀も多くを手がけている。1927年春陽会5回展から石井鶴三等と「挿絵室」設置。挿絵では1937年の永井荷風「溼東綺譚」を新聞挿絵の代表作とする。1958(昭和33)年11月18日東京で逝去。1959年には遺著『東京繁盛記』に日本芸術院賞恩賜賞が贈られた。

油彩画では1928年《Panの会》(第6回春陽会展)、1932年《牛肉店帳場》(第10回春陽会展)などが知られている。版画では、1913年11月16日の大阪朝日新聞附録「日曜附録 版画展覧会」に「木版画というもの」を執筆すると共に版画《顔》を掲載。1923年から24年にかけて関東大震災被災の状況を作品にした木版彩色絵葉書『荒都函絵』第一集・第二集(神田の巻)を自家出版(各5枚組 彫は野村俊彦)。1924年の《玄蕃立去る》(高見沢遠治刀 第2回春陽会展)。1926年に河野通勢・岡本一平の三者で刊行した『歌舞伎絵版画集』第一集・第二集(大判多色摺版画各1点収載)。1928年の《紙治》、1934年頃の加藤版画制作《猫の銭湯》・《連獅子》が知られる。主に伝統木版の職人たちと協業の版画制作である。【文献】『生誕120年 木村荘八展』図録(東京ステーションギャラリー 2013) (岩切)

木村清太郎 (きむら・せいたろう)

関西美術院に学ぶ。1928(昭和3)年12月に平塚運一を講師として開かれた木版画講習会(主催:木版画同好会、後援:京都図画研究会、会場:山本画箋堂)に参加。

1932年5月の第3回京都工芸美術展に木版画《花園風景》《洛北風景》、11月の第1回関西創作版画展（京都府植物園・大正記念館）に《煙突のある風景》《風景A》《風景B》、1933年1月の京都創作版画会第3回展に《裸婦》《洛北風景》など10点、1935年5月の第1回京都市展に《静物》を出品。また、1933年5月に阿部正晴・長永治良・政田英三と『興版』を創刊し、《棧橋と船》《幼児像》《プリムラ》を発表した。次号以降の刊行は不明である。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／『興版』1(1933.5)（三木）

木村節三（きむら・せつぞう）

1932年に静岡で創刊された版画誌『版画座』第7号（1933.5）に《風景》、第8号（1933.6）に《梅と犬と猫》、第10号（1933.8）の裏表紙カットを発表。《梅と犬と猫》には「これは漫画を版になをした私の最初のものである。（中略）季節はづれの植物をもってきたのは我々から杜撰であった」と言葉をそえている。また、静岡の尾崎邦二郎が纏めた童謡集『竹笛』（1932 谷島屋書店）に杉山正義、真澄忠夫と共に「木村節三 名で木版挿絵『落葉』の制作がある。同著奥付では「印刷者 木村節三 静岡市下石町一丁目」となっており、静岡で印刷業に関わりがあったのかもしれない。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

木村忠通（きむら・ただみち）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）在学中に、同校生徒が発行した版画誌『刀』（1928～1932）に参加。その第11輯（1931）に《船》、第12輯（1931）に《鹿》を発表する。【文献】『版画をつづる夢』図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）

木村丁稚（きむら・ていじ）

明治に発行された石版印刷業界誌『虹』第1巻6号（1908.7）に石版画《爪弾き》《夏の窓》《金魚》《千本桜すしやの場》の4点を発表。現在、『虹』は第1巻6号～第3巻3号（1910.3）のうち7号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

木村版兵（きむら・はんべい）

1943（昭和18）年6月の第12回日本版画協会展に木版画《動物喜戯》を出品。また、恩地孝一郎の主催する一木会にも参加し、翌1944年の『一木集』第1輯（9月発行）に《梅》を発表した。【文献】『第12回日本版画協会展目録』／『一木会展一恩地孝一郎とその周辺』図録（リッカー美術館 1979）（三木）

木村百木（きむら・ひゃくぼく） 1884～没年不詳

日本画家。戦前、「東京二十景」の木版画（各18×25）を制作。《永代橋》《言問橋》《桜田門》《日比谷公園》《九段》《上野美術館》《不忍池弁天》その他など。また、自身の日本画作品をまとめた『木村百木画集 癸酉刊』（自刊 1933 図版69図 和装本）を刊行。宮島資夫『禅に行く』（創造社 1941）、岩村俊武『続馬鹿鳥の声』（富山房 1944）の装丁なども手掛ける。なお、ウィキペディアによれば、「1884（明治17）年東京都小金井市前原町に生まれる。本名は木村春三。京都大学の学生時代に禅の講演を聴いて、学校を中退し、修行の道に入る。作品傾向として、水墨画、版画で木を題材とする作品がよく

見られる。その他に山を題材にする作品も見られる。人物画の作品に見られる題材は仙人、仏様、達磨大師などを生涯に制作している」とあるが、履歴の内容については、未確認。【文献】『木村百木』（独立行政法人国立美術館ホームページ）／『山田書店新収目録』30、51（1997.10、2002冬）（樋口）

木村武山（きむら・ぶざん） 1876～1942

1876（明治9）年7月13日、茨城県西茨城郡北山内村箱田（現在は笠間市）に生まれる。本名信太郎。2歳頃から南画をはじめ、12歳で武山を号として名乗る。1890年、東京の開成中学に入学するが、翌年東京美術学校日本画科に入り、教授下山観山の影響を受ける。1896年に卒業、研究科に進学し、1898年に修了。日本絵画協会絵画共進会で受賞。1901（明治34）年に創立した日本美術院に参加するが、初めは日本美術院創立補員であり、後に正員となる。1902年頃からは観山や大観らとともに美術院を支える立場にもなる。1906年、岡倉天心らの五浦移転に同行し、1914年には日本美術院の再興に、その後の院の経営にも尽力する。1937年に脳溢血で倒れた後は、郷里笠間で、利かなくなった右手から左手に絵筆を持ち替えて制作するようになり、「左武山」の異名を取る。1942（昭和17）年11月29日喘息のため逝去。版画関係では日本版画会機関誌『コロロミ』1年1号（1913.12）に《竹》を発表。1921年には木版画《伊勢大廟に祈る》を制作。また『日蓮聖人御伝木版画 宗祖六百五拾遠忌御報恩記念』（日蓮聖人御伝版画刊行会〔1928.12 33図〕）のために結城素明、川崎小虎などと共に原画を担当する。【文献】『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）／『創作版画誌の系譜』（加治）

木村政夫（きむら・まさお）

1936年8月8・9日開催の京都エッチング協会主催（中井平三郎幹事 西田武雄講師）のエッチング講習会に参加。京都エッチング協会会員。但し、作品は未見。【文献】『エッチング』47（樋口）

木村義男（きむら・よしお） 1899～没年不詳

1899（明治32）年島根県八束郡本庄村（現・松江市）に生まれる。友人の平塚運一の誘いで16歳の時に上京。平塚運一と同じ下宿で川端画学校洋画科に通い、藤島武二に学ぶ。若くして帝展に入選を重ねるが、家庭の事情で松江に帰郷。松江に定住し、島根県の美術振興に尽くす。1985（昭和60）年2月24日逝去。武井武雄が主宰する「版交の会」（第3回よりは「榛の会」と改称）の第1回（1935）からの会員（1954年第20回までは会員を確認）。【文献】『木村義男画集』（木村義男画集刊行会 1975）／『20世紀物故日本画家事典』（美術年鑑社 1998）／市道和豊『奇跡の成立 榛の会昭和21年』（室町書房 2008）（樋口）

木藪武士（きやぶ・たけし）

洋画家として知られる宇治山哲平が、昭和初期に出身地大分県日田町（現在は日田市）で美術愛好家たちと発行した版画誌『朴ノ木』第2号（1933.7）に《山治ひの道》を発表。【文献】池田隆代『大分県における創作版画誌』（『大分県立芸術会館研究紀要』1 2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

清永完治 (きよなが・かんじ) 1896～1971

1896(明治29)年下関で生まれる。商社員として、仙台や神戸で勤務した後、回船問屋を営んでいた大池忠助の娘婿となり、1931年に渡朝。釜山の土城町1ノ6に、その後は大倉町2ノ9に居住。同地で農業機器や焼玉エンジンなどの販売をしながら、仙台時代から興味を持っていた郷土玩具、その釜山玩具同好会を主宰。同好会誌『土偶』『土偶志(デコシ)』(1935～1943)を発行し、日本や朝鮮の玩具を紹介する一方、日本郷土玩具協会に所属し、日本内地の会員とも交流する。また東京の料治熊太主宰の『版芸術』第53号(1936.8)で「朝鮮土俗玩具集」が特集され、料治とも交友が生まれる。玩具との関わりは馬の玩具蒐集が発端だったため、自らを木馬洞と名乗る。1940年には同地で朱美之会を設立し、版画誌『朱美之集』(1940～1942)を発行。第1冊(1940.5)に《枇杷(題箋)》《或る路地》、第2冊(1940.8)に《初夏》、第3冊(1940.12)に《山門風景》、第4冊(1941.9)に《水仙(題箋)》《水原長安門》、第5冊(1942.8)に《道》などの朝鮮風景の版画を発表。内地の版画家たちとも盛んに交流を行い、朱美之会には同地の版画家のほかにも武藤完一や中川雄太郎など本土の版画家たちが多く参加している。蔵書票にも関心を持ち、料治が1937年頃に発行した『版画蔵票』の第4.5.8.10号[1937-1938]に《蹴房》、《鮮童》など、やはり朝鮮の風俗を扱った蔵書票を発表し、青森の佐藤米次郎発行の『趣味の蔵書票』第5回(1940)にも蔵書票《木形子》を発表している。なお、武藤が主宰した『九州版画』最終24号(1941.12)の会員名簿(1941年11月現在)に清永の名前は掲載されているものの、作品の発表はない。1971年逝去。【文献】『おもちゃ絵集』(4輯 1936.6)／鈴木文子「玩具と帝国趣味集団の通信ネットワークと植民地」(『仏教大学』文学部論集)93号 2009.3)／『創作版画誌の系譜』(加治)

清原ひとし (きよはら・ひとし) 1896～1956

1896(明治29)年9月26日茨城県稲敷郡長戸村(現・龍ヶ崎市)に生まれる。本名は斉。1913年県立土浦中学校卒業。上京して松本楓湖の画塾「安雅塾」に入門。その後、今村紫紅、速水御舟、更に堅山南風に師事。文学にも関心が深く、北原白秋、鈴木三重吉に学び、短歌誌『香蘭』、児童雑誌『赤い鳥』同人として作歌や随筆を発表。また『面白倶楽部』(講談社)などに幼き日々を追想する温かみのある挿絵や童画を描く。1926年北原白秋、岡本一平と「三人社」を設立、同人展を開催。1930年第17回院展に《いちご》が初入選。この頃より日本画の制作に力を入れ、院展に出品を続ける。第39回から第41回院展(1954～56)に3年連続で日本美術院賞(大観賞)を受賞の直後、1956(昭和31)年9月14日急逝した。版画は、日本や朝鮮の風俗を題材とした木版画を制作。1943年版画奉公会に供出版画《いろり》《浅間附近》《尾瀬の早春》《浅間嶺》《朝鮮金剛》の制作や『童画集』(加藤版画研究所 4枚)、『子供四題』(刊年不明)、『童画シリーズ』(1950・51)などの木版画集の刊行がある。【文献】『エッチング』128／『近代日本版画大系』(毎日新聞社 1976)／『加藤版画研究所四十余年作品の歩み』パンフレット (樋口)

吉良義憲 (きら・よしのり)

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第1号(1933.9)に《阿蘇山遠望》、第2号(1934.1)に《犬の首》を発表。『九州版画』は1933年8月、大分県師範学校に

おける第2回版画講習会(講師:平塚運一)がきっかけで発刊された。当時、吉良は大分県直入郡城原校(尋常小学校)に教師として勤務しており、この版画講習会に参加したのと考えられる。【文献】武藤完一「編集後記」『九州版画』1(1933.9)／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

桐谷洗鱗 (きり [が] や・せんりん) 1876～1932

1876(明治9)年9月1日〔10年10月とも〕新潟県三島郡宮本村(現・長岡市)に生まれる。本名深見長之助。1897年上京、富岡永洗に師事。1901年桐谷直秀の四女たきと結婚。「洗」の一字をもらって深見長之助を改め桐谷洗鱗と号す。永洗の死後は橋本雅邦に師事する。1907年東京美術学校日本画科選科を卒業。同年第1回文展に入選。1908年京都、奈良に赴いて仏画模写に携わり「訪古画帖」を作成。その後2度インドに渡って「アジャンタ石窟壁画」の模写を行い、タゴール、岡倉天心と出会う。1916年第10回文展に《仏地憧憬の旅》、1917年第11回文展に《涼園》で入選。1926年から1931年にかけて米国、東インド諸島、欧州などを画遊。インドのマハボディ協会(インド各地の聖地の保存修繕や国内外での仏教の普及を目的に1891年にスリランカで創立され現在でも活動を続けている)の招待によるブッダガヤの壁画制作のため渡印準備中、1932(昭和7)年7月19日急逝した。版画の制作は、1923年関東大震災の被災の様子を写生してその惨状を描いた『大正震災木版画集』(画報社 1924 全36図)に《避難民の混雑(下谷)》《西郷銅像(上野)》《臨時バラック(本所)》《救護所(深川)》《施米(浅草)》《吉原大門(浅草)》の6図を制作する。【文献】『版画にみる東京の風景』図録(大田区立郷土博物館 2002)／「桐谷洗鱗さん」『市川のエピック月刊いちかわインタビュー』189(2008.8)／『桐谷洗鱗画伯小傳』(東京美術倶楽部 於 1933)／『20世紀物故日本画事典』(美術年鑑社 1998) (樋口)

木和村創爾郎 (きわむら・そうじろう) 1900～1973

1900(明治23)年1月松山市に生まれる。本名正次郎。1925年京都市立絵画専門学校卒業(同校同窓会名簿による)、西山翠嶂塾に学ぶ。1942年上京し、1943年以降、独学で木版画(後に孔版併用)の制作に専念する。1946年第1回日展に木版画《霊廟好日》を出品。1947年第21回国画会展で木版画《ニコライ堂の晩秋》が褒状受賞。1948年日本版画協会会員となる。1956年光風会会員。1960年日本版画協会会則改変により、同会会員は他の独立公募の版画団体の構成員を兼ねることができなくなったことから、日本版画協会を退会して、棟方志功、永瀬義郎、武田由平らと「日版会」の創立に参加する。1969年パリに渡り、1972年ル・サロン(パリ)で《蝶々夫人の家》が金賞受賞。30年に亘る画業を纏めた『KIWAMURA Soujiro L'ALBUM DE GRAVURE sur bois』(『木和村創爾郎木版画集』)を1953年8月に自費出版する。その直後の同(昭和48)年11月6日東京柴又で逝去した。【文献】『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京国立文化財研究所 1976)／関野準一郎「我が版画家銘々録VI 山口源と木和村創爾郎」『版画芸術』16(阿部出版 1977.1)／「木和村創爾郎年譜」『東京都美術館収蔵作品図録II 版画』(1986)／『日本の版画 1941-1950』(千葉市美術館 2008) (樋口)